序　　上原茂胤

昭和49年10月5日　今日は父の命日である。なんだか最近、軍隊に入ってからの自分の生活をたとえ断片的にせよ記憶のままに記録しておきたくなったし、子供達も賛成の様であるので、一応暇をみつけて思い出すままに記してみる事にする。（何しろ 30年も前の事だし、少しは誤りがあるかも知れぬが、何とか記憶のなくならぬ間に書いてみる。）

先日（9月6日）に神戸一中の36回目の東京のクラス会が伊達先生をお迎えして上野で行われたがその時、中学2年から当時陸軍士官学校に行った河野公一君が卒業以来初めて顔を出し、聞くところによると幼年学校から陸軍士官学校、陸軍大学を出てビルマ方面軍の参謀でラングーンに居り、丁度私のラングーンに居た頃で話がすっかり合い、余計ビルマの敗戦記を中心に書いてみたくなった。

○　昭和17年10月1日　それは実に嫌な日だった。学生時代、学校教練の配属の軍人によく逆らっていた自分が現役（甲種合格）としていよいよ入営する日だ。

北大時代には学生を軍人と同じ様にしばりつける軍人が大嫌いで何かにつけ反発したが、ひとたび卒業して入営となると（殊にこの頃は即戦争という事態だった）日本人として国家の為に軍人として笑われない人間になろうと考えた私ではあったが（それは大学を出たという一種のプライドで）やっぱり何としてもこの入営の日は、いやな軍隊に入るのだから悲しくもあり淋しかった。

札幌での学生時代はいささか気が強かったと自負していたが、入営前日の9月30日に兄と一緒に姫路市内の安宿に泊まり、夕食を共にしたが、流石に飯ものどを通らぬ位で、仕方なく髪を刈らされた坊主頭をなでながら、哀れなものだと思った。

明けて10月1日、いよいよ入営する中部五十四部隊（輜重隊*）へと奉公袋を下げて歩いて行ったときは何と情けなかった事か。ただこの時偶然北大の同窓の赤木君にあったと記憶するが（彼は隣の野砲に入隊だった）、二人で顔を見合わせて何だか少しは心強く思った。その後時々塀越しにちょっと駄べった記憶もあるが、彼は今どこでどうして居るのかしら・・・。　　*輜重隊 シチョウタイ　軍隊で、糧食・被服・弾薬・武器などの荷物を管理する部隊

兵営でのその日の昼食は赤飯と安物のお頭付きの焼魚と記憶しているが、それも殆ど食べる気がせず、２、３日たってやっと空腹にがまんが出来ず、がつがつ食い始めたが、人間はあり余っているとぜいたくを言っているが、いよいよとなれば浅ましいもので、何でも食べるものだと思った。

○　神戸一中を卒業してから札幌で北大予科、本科の生活をしたものだから関西弁をしゃべる機会が余りなかったが、郷里のこの姫路の部隊に入るとまわりはすべて関西弁。お蔭でここで一日ですっかり中学時代の神戸弁にかえってしまったのには吹き出したくなった関学、神戸高商、商大、東大、明大、早大、関大、同志社大、大阪商大、等色々の学校出が多く、その点では一面また面白いこともあった。

ところで、体格のよい私がなぜ輜重隊に入隊させられたのかわからぬが、馬でなく自動車部隊ならばよいと思っていたところ、運よく自動車隊の植田中隊に入り、初年兵の教官は遠藤少尉、小峠見習士官（直ぐ少尉になった）だった。

内務班の仕事は嫌だし、大変だったが、演習、訓練は私にとっては肉体的には楽だった。何しろ卒業前に予科の野球部の練習が終わってからも、ひとりでグランドを７～８回も

走って、軍隊に入っても困らぬ様にトレーニングをして居たのだから。（今でも覚えているが、当時の部長だった坂元先生に君はすごいねと言われた）。
とにかく、駈足、匍匐*前進等たいして苦にならなかったし、手榴弾を投げさせれば一番遠くへ投げるし、入隊数日後、植田中隊長の閲兵（？）があった時、遠藤教官がわざわざ、これが北大で野球をしていた上原ですと紹介されたのには驚いたが、お蔭で私は中隊長、教官、班長には絶大なる信用があった様に思う。*匍匐　ホフク　地に伏し手と足とで這うこと

軍隊というところは不思議なところで、最初がよいと最後までよいようで、北大時代の教練の教官にも同じような経験をしていたので何だかおかしくて仕様がなかった。北大時代予科の時は教官のいうことを余りきかず、頭髪を短くしろと言われてもなかなか刈らず言う事を聞かない私に、それでは落第点をつけると言われたので、どうぞと答えたら本当に落第点をつけられ、将校適にしてくれず下士官適にされた。然し、大学の時は、戦争が段々拡大し、北海道でも学生の手榴弾投擲が教練の実科にかわり、これはわたしが大学No.１の自負があったし、標的の円内に投げこむのが上手で北海道全道で第２位になったりしたので、すっかり大学の教官に信用がつき、大学卒の時は士官適任となっており、軍人なんていい加減なものだと思ったりしていたので、一層おかしく思った。
初年兵として入隊し、数ヶ月して最初の（第一期）幹部候補生の試験があったが、その時は私が中隊でトップだった由で、その結果を知っている教官や本部教務の上級兵に”お前は中学、大学は士官適なのに何故予科は下士官適だったのか”と聞かれたが、学生時代の教官に反発していた自分の生活を振り返ってみて、私が中隊一になるとは面白くて仕方がなかったと同時に、人間の価値なんて軽々しく決めるべきものでないとつくづく感じたものである。
何はともあれ、自分がこんなに強く軍隊で生きていけるのも、北大の恵迪寮及び野球部の生活のお蔭だと一層深く感じた。
苦しかったのは初年兵教育の時代だったが、今にして思えば、姫路市の北の広森山への駈足も中隊長（植田中尉）宅への夜の公用外出、初めての姫路の市内への外出、また外出先で片山君と市内の中華料理店で支那料理を満喫したり、兄の知人（佐野さん）の居る明治屋で休ませて貰った事もあった。また、街の中で欠礼して大目玉を食った事もあった。休日の外出許可の日、片山くんの妹さんが片山くんに会いに来て植橋くんと私が一緒に姫路市内の中華料理店で昼食の御馳走にあずかったが、久し振りに食べた娑婆の料理がおいしくて嬉しかった。人間、意地汚いものだ。又ある日、全員外出許可があり、山口君ほか１名が門限に遅れて帰ってきて、先任者として自分が殴られて参った記憶もある。（終戦後、この山口君と元町で会い、”すまなかった”と言われ思い出したものである。）
また、いつだったか、将校、班長不在で私が班員全員を引率して広森山へ駈足して来いと言われ、山上の茶店であっさり休憩、軍隊に入っているとガツガツしているので、茶店で好きなものを買うのを黙認しておいたら、帰営したところ、早速敷田少尉に先任者としてぶん殴られた記憶がある。何故だろうと思ったら、兵舎から双眼鏡で見ていてわかったとの事、これには私も参った。
また、部隊の各中隊対抗の野球試合があった。日曜日にちょうど有馬先輩の兄弟と母上が面会に来てくれて、母のおはぎを皆でほおばっていたので、野球に出たくなくて面会所にいたら、西田中尉？がわざわざ”上原おらんか”と呼びに来て、野球に直ぐ出てくれ、母上も特別に営内のグランドに入れてよいと言われたので仕方なく野球をやって大勝した記

憶もある。
　母のおはぎで思い出したが、神戸から姫路までよくおはぎをもって面会に来てくれ、本当に涙の出るほど嬉しかったが、ある日曜日、母が一人で来てくれたが、丁度その前日から輓馬*の中隊で伝染病が出たとかで面会禁止になり、垣根越しに（道路と兵舎との間に大きな溝があり飛び越えられない）母と目があった時は、今までの親不孝者の自分に面会に来てくれる母に何だか申し訳なくて胸ににじんと来るものがあった。
*輓馬　バンバ　車両をひかせる馬
　尤も物の豊富な今の時代の人には到底理解できぬと思うが、軍隊では好きなものもたべられず、この面会日に家から持ってきてくれるおはぎ等の好物をたべるのが最上の楽しみと喜びであったのだ。
　だいぶ兵営生活も慣れて来ると、衛兵にも立ち、歩哨で夜中、暗闇の営庭を巡回する時、姫路市内の灯が点々と見え、今頃母達はどうしているか、灯の見える家の人はゆっくり眠れるのに自分は情けないなあと、早く勤務が終わらぬかと思ったこともあった。その灯を見ながら、神戸を札幌をと学生時代の思い出を頭にめぐらしながら自分を元気づけ動哨*したものだった。　　*動哨　ドウシヨウ　歩哨があたりを回って警戒すること
　そうこうする間に、甲幹と乙幹のわかれる試験があった。
ここで姫路高校出身の快男児（名前は忘れた）が甲幹になれなかったのを今でも覚えているし、何だか甲幹と乙幹にわかれ乙幹にされた人が気の毒に思われた。私は甲幹となり（昭和 18 年 4 月 1 日付）、東京の輜重兵学校に行けるぞと喜んでいたところ、この年は機甲整備の方は東京に行けるが、一般自動車は東京ではなく今年は北京の北支那自動車教育隊に入隊するのだということになっていささかがっかりした。（今にして思えば北京に行ったのも良い思い出ではある。）
　いよいよ、北京に出発する日だ。（5 月 3 日 20 時姫路出発、5 月 4 日 11 時 30 分下関着、関釜連絡船 14 時 40 分出発。5 月 5 日釜山正午着、14 時釜山出発、5 月 6 日 5 時頃京城着、
5 月 9 日夜 11 時北京到着。）
　私は自動車隊輓馬隊合わせての先任者として部隊長に出発の申告をし、たしか応召の年配の伍長さん（名前は忘れてしまったが温厚な人だった）の引率で姫路駅から列車の人となった。何だか万感胸に満つものがあったが、私は大学の時、満州（現在の中国の東北）に実習に行った経験があったので他の人よりは気が楽だったと思う。
　釜山できたない丘の兵舎まで行った記憶もあるが、すべてうろ覚えで朝鮮を鉄道で通り抜ける時、矢張り禿山だなあと感じた。（昭和 41 年韓国に出張し、釜山の駅に行き、少しこの頃を思い出した。）

◎北京での生活
○　北京では一区隊に入ったが、一区隊と二区隊に姫路と朝鮮京城（現在のソウル）の部隊が半分ずつ混成されて区隊を編成し、一区隊の区隊長は宮本中尉、助教の下士官は首藤軍曹だった。
　北京での生活は昭和 18 年 5 月から 19 年の初めまでで、ここでも色々の事を経験した。自動車隊なので、ある期間に（1 ヶ月位か？、肥後君と同じ組だった）フォードのトラックを 5 人位で完全に分解し、それから弁のすり合わせ等あらゆる部分を整備し、組み立てる作業があったが、最終日に組み立てが完了し、エンジンの調整にかかったが、なかなか

エンジンがかからず気化器に生ガソリンを入れながらふかしていたら導火してガソリンに点火し、車庫のアンペラ扉に火がつき、あわててエンジンの上から防火砂をかけて消したが、瞬間、俺は重営倉に入れられ死ぬんだと頭の中にひらめいた。しかし幸い防火砂のおかげで消化出来たが、気化器から砂が入ったのだから大変。また分解掃除の必要があるが何しろ翌日の朝までには整備して動かさねばならぬので、班長等にかくれ自動車に詳しい他の班の田村国雄君（現在大鰐町助役）や岡本君等が手伝ってくれ、徹夜で整備し直し、やっと始動出来たのには感激だった。

もしこの時、火災になっていたら、今ごろ私はこの世には存在しなかったろう。先日この時の田村君に会ってこの話をしたところ、彼もその時そう考えたそうだった。

万里の長城へ自動車演習に行き、途中黄塵万丈*で一瞬前の車のテールも見えずになるが、そのままハンドルを握って走っていると、その間にまた前車のテールが見え出しほっとした事も幾度かあった。　*黄塵万丈　コウジンバンジョウ　風にのった土煙が空高く立ち昇るさま

何しろ20台位のトラックの行進なので、若しブレーキをかければ後からの車に追突され玉突きの大事故になる状況だし、本当にびくびくものだった事もある。この頃使用したトラックはトヨタ日産及び古いフォードだった。

○　万里の長城の上まで駈足でのぼり、裸で体操した事もあるし、望楼の中に支那人の黒衣を着たのが、死んで居る姿を見た事もあり、何しろ日本では考えられぬ広大な土地なので、説明もつきかねる。

また、有名な山海関に出掛け天下第一関の額の下で写真を撮ったのもよい思い出だ。日支事変の発端になった盧溝橋へも自動車行軍したが、別に何という場所でもないので、ああこれが日支事変の糸口になった所かと変な気がした。

兵舎は有名な万寿山のふもとにあるので、朝はよく万寿山、昆明湖まで駈足させられたが、その中の建物の彫刻のすばらしさは今も忘れられない。

時には首藤助教と公用外出で北京に出して貰って、天壇、紫禁城、前門等を見て写真をとったり、天府井（ワンフーチン、東京の銀座の様なもの）で姑娘の支那服を久し振りに見て驚いたものだった。

○　今では土地の名を思い出す事が出来ぬが、あちこち北京郊外へ自動車演習に出掛けて教官、助教の目を盗んで南京豆を買ったりサイダーを買って飲んだりするのがスリルと食欲で楽しみだったが、これには軍から貰う金では不十分で何とか余分の金をつくらねばならぬ訳だが、何しろ北京にいる事とて、母から面会に来て貰ってこっそり小遣いを貰う（姫路ではよくした手段）わけにもいかず、これには弱ったが、ふと悪知恵がうかんできた。中学時代のポン友の森祥三君（現在、西村祥三、姫路市内で医院開業中）が軍医少尉として北京の病院に来て居るのを思い出し、母から森君のところへ送金し、彼が時々私に面会に来てくれて金を渡してくれるという方法をとった。森君が”お前、どうしてそんなに金がいるのか”と不思議そうに言うから、軍医将校さんにはわからぬだろうが兵は皆娑婆のものを食いたがって居るのだから面倒でも頼むと、いつも彼をわずらわしたが、持つべきものは学校時代の友達だとつくづく感じたものだった。何しろ異国の北京で中学時代の友人の森君がいてくれて、しかも軍医で本当に心強かった。尤も復員後、姫路で一回、神戸での同窓会で一回と合計二回しか会っていないが本当に有難かった。

尤も、同期の関学出の戦友片山君（現在大坂で印刷業を営み、宝塚在住）は”上原、お前は軍隊の成績は優秀だが、上手に上官の目をぬすんで食べ物を買ったり要領がよく心臓が強いなあ”と感心していたが、これも学生時代の運動部及び寮の生活の賜物と思う。

○　多分夏の夜だったと思うが、北京郊外を自動車の夜行軍をしていた時、民家の屋根の上に外で眠って居る支那人が居るのに驚いたが、時々ヘッドライトに照らされて、支那人が道路の上でゴロ寝しているので慌ててよけて走った事もあり、さすがに大国だわいと思ったが、当時の状況から見て今の中国がどんなに進んで来たのか一度この目で確かめてみたいものだ。
○　我々が入隊した北京の北支那自動車教育隊は幹部候補生隊と下士官候補者隊の二つだったが、途中から我々幹部候補生隊は保定幹部候補生隊に編入され、下士官候補隊は南京に行き、そのかわりに輓馬の幹部候補生隊がやって来て、我々のところは保定幹部候補生隊の輜重隊になり、甲種幹部候補生のみとなった。残念なことに、従来の北支那自動車教育隊と少し様子がかわり、何かにつけうるさくなった様な気がしたし、従来卒業式後の祝宴は有名な北京第一の北京飯店（ホテル）でやっていたのが、なくなったのは本当に残念だった。また、輓馬が来たお蔭で経験のためと言って、２週間程自動車隊が輓馬を、輓馬隊が自動車の勉強・演習をさせられ、馬の連中は自動車に乗れると大喜びだが、我々自動車隊の連中は馬の扱いにうんざりさせられたのも一つの思い出だ。
　尤も北大予科の時、夏休みに北海道の新冠（ニイカップ）御料牧場へ２週間ばかりアルバイトに行き、２日間馬に乗せて貰ったのがこの時すこし役立った。
○　ある日、銃剣術の試合があったが、その時、突きをした何かの拍子に左の肩がぬけ、なんともならずぐっぐっと後ずさりして左肩を何とはなしに無茶苦茶に動かしていたらガクンと入って試合を続行した事があった。それ以来、水泳をしてもバレーボールをしても左肩を無理するとガクンと抜けるが、まわしているとまたガクンと入るようになり、驚いている次第。
○　甲幹は将校の卵であり、すべて自主的にやらねばならぬとしつけられたが、酒保（軍の売店）で鉛筆、ノート等買っても、そこの価格表を見て自分で間違いなくその金額を箱に入れる仕組みになっていた。たまたまその日の売り上げ代金と箱の中の金額が合わないと全員非常招集で財布の中の金を調べられるのには弱ったが（個人の金銭出納帳と合うかどうか）、何故こんなやさしい事が学校出のインテリアと自負する甲幹の連中にできぬのかと情けなくなった事もあった。
○　側車の路上の運転演習で北京市内へ出掛け、久し振りに都会の雰囲気が味わえるとキョロキョロしていたら、北京市内の繁華街の交叉点で停止し、スタートの時エンストし大慌てしたのも一つの笑い話だが、これは昭和 18 年だったので思えば未だよい時代だったかもしれない。
　北京の繁華街に王府井（ワンフーチン）というところがあるが、昨年（昭和 48 年）田中総理が北京に出かけてからテレビでその名前が出たり、情景がうつしだされるとさすがに懐かしい。昔の紫禁城は今では故宮というらしいが、テレビの画面に出て来ると、昔そこへ行った時のことが思い出され懐かしい。部隊は北京と万寿山との中間の郊外にあったと思うが、何とかもう一度行ってみたい。
○　ある日、部隊付近の広野原で支那の捕虜が数 10 名作業させられており、それが逃亡しないように、実弾をこめた小銃に付け剣をして監視につかされた事があったが、昼の休憩時にバケツから塩汁と高粱のみの食事を、支那の隊長から順番に当番が配っているのをじっと見ていて、戦争とはいえ、可哀相で仕方がなかった。どうか目の前で逃亡してくれるなと祈る気持ちであった。何故ならば逃亡されれば実弾の入った小銃を発射せねばならぬから------。彼らにも親も兄弟も子供もいるだろうにと思うと、何だか哀れでならなかっ

た。捕虜の監視は二度とやりたくないと思った。（尤も、幸いなことにこれ一回きりだったが）
○　昭和18年12月の卒業で見習士官になったわけだが、卒業式は保定まで出かけ、偶然保定の歩兵の幹候補隊に小学校、中学校時代の友人、安藤克夫君がいてびっくりした。なお卒業式には三笠宮（当時、若杉参謀といった）が台臨され、各隊の一番は御陪食の栄を賜ることになったが、私は残念ながら二番で駄目だったが、我々の区隊の一番はたしか東大出の高瀬君だったと思う。彼は外交畑に入ったと思うが今はどうしているか知らない。隣の二区隊に本田君というのがいて、彼は三校時代私の中学の友人、山本直太君と親したかったとかでよくおしゃべりしたが、彼は通産省で活躍していたが、花の18年組におされて、事務次官直前で現役を退いたのを新聞で見たが、未だに各方面で活躍中らしく喜ばしい。（51年秋、丸善石油社長となる。）
　ところで、保定での卒業式が終わって列車で北京に帰ってきた途端にこちらは見習士官で首藤軍曹（助教）から逆に敬礼され、攻守ところをかえた様な状態に今更のごとく日本帝国陸軍の序列というものに驚かされた。早速その晩から、私が第一回の週番士官につけられ、首藤軍曹が週番下士官になり噴飯物だった。とにかく、北支那自動車隊から保定幹候隊に編入されたお蔭で北京飯店で卒業の宴会が出来なかったのがかえすがえすも残念でならなかった。
○　見習い士官になって直ぐ内地へ帰れると思っていたが、どんな理由か知らぬが昭和19年1月中旬頃まで北京にそのまま置かれて少し不安でもあり、かつがっかりさせられたが、丁度その頃大学高専の理科系の学校卒業者で南方燃料廠に転属希望があれば（技術将校の代用として）区隊長に申し出よとのことだったので、内心これはしめたと思った。
　何しろ鉄砲をもって戦争をするのが大嫌いな自分が致し方なく入営してここまで来たが、南方燃料廠で技術関係の仕事が出来れば理科系を出た自分の将来の為にはなはだ好都合と喜び勇んで区隊長に申し出た。ところが区隊長は、お前は姫路の聯隊*の先任（成績がトップの事）だから、お前は原隊に帰って教官になるコースだし、もしお前を南方燃料廠に推薦すると原隊からうらまれると言って弱った弱ったの連発、こちらは必死になって頼んだところ、区隊長も面白い男で、実は俺も南方に行きたいのだ。よし思い切って推薦するから先に南方に行っておれ。必ず俺も後から南方へ行くと言ってくれ、ここで私の方向がぐっと変わったわけで神のみぞ知ると言うべきか。　*聯隊　レンタイ　軍隊編制上の単位の一つ
　なお、この時、姫路から来た連中では志水一巴君が私と一緒に南方燃料廠に行く事になった。なお、九州の部隊からきた連中と併せて５～６名が南方燃料廠へ転属する事になったと記憶する。
　北支那自動車隊時代の修養日誌（軍隊では必ずつけさせられたもの）が見つかったので、要点を記す。
昭和18年5月3日（晴）
5月3日（月）晴
　いよいよ、20時姫路出発、軍用列車は一路下関に向う。
5月4日（火）曇
　下関に11時半到着。間釜連絡船は14時４０分出発。故国を離れる。
5月5日（水）晴
　船は予定より遅れて12時釜山着、14時釜山出発。鉄路を北京へと。

5月6日（木）晴
　5時頃京城着。北に進むに従いリンゴの樹が目につく。
5月7日（金）晴
　列車は順調。宮原で満鉄の兄夫婦に会う。
5月9日（日）晴
　列車は北支那に入り、夜11時北京着。
　迎えの隊の車で屯営に12時頃着く。
5月12日（水）雨
　入隊式あり。今坂隊長の訓示あり。
　我々一区隊の区隊長は宮本中尉。隣の二区隊長は白倉中尉、三区隊区隊長松蒲中尉。
5月18日（火）晴
　陸軍病院へレントゲン検査に行く。初めて昼の北京市街を見る。途中華北農業試験場の横を通る。
5月28日（金）晴
　朝、隊長殿離任。営門前で見送る。自動車教練は香山―飛行場―農事試験場―屯営の順なり。
5月30日（日）晴
　点呼後、万寿山に駈足を以て行く。朝の涼気の中を天下の美景に恍惚としながら進む。
5月31日（月）晴
　朝礼式でアッツ島放棄の確報を聞く。
6月2日（水）晴
　伍長となる。
6月3日（木）晴
　自動車の終日行軍演習。黄塵万丈を経験す。
6月12日（土）晴
　射撃演習、臥虎山の下で行う。
　拳銃、軽機の射撃を初めて経験。
６月２５日（金）晴
　保定幹部候補生隊となる。輜重隊の隊長は上山少佐。
６月２８日（月）曇時々晴
　臥虎山で自動車分解搬送を行う。初めての事とて驚嘆するのみ。
７月８日（木）雨のち晴
　午後、一文字山支那事変発端の地に行く。昭和１２年７月７日を想起し感無量。
７月９日（金）曇
　自動車操縦訓練は香山―田村―農試―屯営のコース。
７月１０日（土）曇
　南口迄操縦演習に行く。
７月１１日（日）晴
　区隊会を万寿山で実施。まるで外出の如し。
７月１３日（火）晴
　屋外調整演習の為、玉泉山方面に行く。玉泉山門で滾々と湧く泉のほとり、美景の清涼の中に包まれ大休止。

７月１７日～２０日
　野外演習で八宝山に出る。4 日間晴天に恵まれる。

◎　北京→広島→昭南（シンガポール）へ
○　昭和 19 年 1 月 8 日？
　いよいよ、北京を発って内地（姫路）へ帰る事になった。（私以下、南方燃料廠へ転属するものは広島で分かれることになるのだが）
　軍医の森君が北京駅へ送りに来てくれて、汽車（特別列車）はたしか満州の本渓湖を通るはずだったので、森君に本渓湖の満鉄にいた哲雄兄に通過の電報を打って貰っておいたところ、兄は満鉄勤務なので軍用列車の通過は皆わかるので（真暗な夜だったと思ったが）姉上と二人で会いに来てくれた。実は私は南方燃料廠本部へ行く以上、いつ死ぬかわからぬし、広島からそのまま昭南（今のシンガポール）の南方燃料廠本部へ行くと母に会えぬかも知れぬし、何とか今までの自分の親不幸のお詫びの手紙（自分としては遺言のつもりだったが）それを兄に渡しておきたかった。うまく渡せたまではよかったが汽車が発車して大分時間がたった頃、輸送司令官の将校に呼ばれ、これだけ多数の見習士官が特別列車で輸送されているのが敵のスパイに知られたら、爆破のおそれもあり、もし本当に爆破されたら日本陸軍としては多数の将校を一度に失い、由々しき一大事なのに、特別輸送列車で通過する電報を打ったとは何事だと目の玉の飛び出る程ぶんなぐられ、いささかがっくりした。
　ところで朝鮮の京城の部隊から来ていた連中は私たちより少し先に原隊に帰っており、我々の列車が京城駅に着いた時、見習士官のさっそうたる姿で、山崎、肥後外数名が駅のプラットホームに来てくれて本当に嬉しかった。（昭和 41 年と 43 年にソウルに行ってこの駅を見たとき、当時を思い出し懐しかった。）
○　１月 14 日？　広島駅頭で姫路の原隊に帰る連中と別れて、私たち南方燃料廠へ転属する 6 名は広島の兵站･本部に行って宿泊すべき市内の旅館を指定され、そこに泊まったが、繁華街の中にある旅館だったと記憶する。＊兵站 ヘイタン 戦場の後方で、補給や連絡を行う機関
　それから船舶司令部に行って、昭南に行くべき船を頼んだところ、たぶん大尉か中尉だと思ったが、その担当将校は翌日の船に乗れという。広島に到着した時、南方に行くために来ているあちこちの見習士官の話では、なかなか適当な船がないので 2 週間も 3 週間も広島の旅館に宿泊して遊んでいると聞いたので、我々も少しゆっくり遊びたいと思っていたのに翌日乗船しろと言われがっかりして、何とかもう少しゆっくりさせて欲しいというと、何を言うかと言われたが、それでも 2 日程後の船にしてくれたので、夜、早速旅館から神戸へ電話して、すぐ広島の旅館に来て欲しいとだけしゃべり（この前の北京からの帰りの事件があるので）電話を切ったが、母と清行兄が無理して翌日すぐ来てくれたので、こっそり持って帰れた北京時代の写真や長靴等内地の人のほしい品物はすべて渡し、小遣いの金を 400 円位貰っただろうか。（この金は卒業と同時に就職した満州電気化学工業（？）から＊＊宅へ＊＊が給料を送ってくれたものだと思うが）見習士官任官手当で貰った約 400 円（当時の大学卒の技術系が初任給 80 円／月）の金と合わせて多分 800~900 円位になったと思う。何しろ南へ行くのだから生きては帰れぬと思っていたので、母と兄に会えたのが本当に嬉しかった。
　その翌日宇品からニューギニア方面のどこかの島に行く大船団の指揮艦たる『うすりー

丸』（たぶん日満航路の客船）の二等船室に我々6名は乗船させて貰った。
　宇品の港へ行く迄その部隊と一緒に街の中を宇品まで行進したと記憶するが、これが見納めになるかも知れぬと思ったが、やっぱり男5人兄弟の一人なので案外呑気といえば呑気だった。街を行進していた時、道路際でじっと私を見ていた母の眼が今も忘れられない。
◎　昭和19年1月16日昭南向け宇品港出発。
○　我々の乗船させて貰ったこの師団の船団は恐らく20隻位あったと思うが、第2図南丸のような捕鯨船もあったし、駆潜艇や駆逐艦もついていたと思う。
　とにかく私たちは客分扱いで二等船室に収まっていたが、敵の潜水艦や飛行機の監視に船上に兵隊が後退で監視員となっていたが、兵では心もとないし、見習士官は双眼鏡も持ってるし、交代でその長になってほしいと言われて途中から協力する事になる。
　この船室では退屈なので碁盤と碁石があったので、私が皆に下手な碁のルールを手ほどきしたら、皆すっかり凝ってしまって南方燃料廠へ着いてからも余り好きでもない碁に付き合いさせられる羽目に陥った。
　この船団は九州からの部隊らしく、我々の中の見習士官で九州久留米の部隊から来ていた某君の昔の友人の弟が兵隊で居り、飯が少なくて腹が減って仕方がないと聞いたので、その戦友も含めて3～4名を私達の部屋に呼び込んで我々の残った飯を食わせたりして大いに喜ばれたこともあった。

○　仏印のカムラン湾に近づいた頃、敵の潜水艦が出没して危ないから一時カムラン湾に待避してその間哨戒するとかで数日間カムラン湾にいたが、そのあたりは海水の色が濁っていて潜水艦を見つけにくいことで有名な場所とのことだった。とにかく、もう大丈夫らしいというので数日後の昼過ぎ出港したものの30分もたたぬうちに潜水艦だという声に甲板に飛び出したところ、遠くの図南丸に命中したらしく船体は少し傾いていた。我々の乗って居た『うすりー丸』は旗艦で船脚が速く、また弾薬が船の前後に満載されているので、もし敵の潜水艦が現れると一目散に逃げると聞いていたが、本当にその通りで急にエンジンの音がたかくなり、フルスピードで逃げ出した。
　潜水艦だと大声がした途端、船室で碁をやっていた連中は白石も黒石もゴチャゴチヤにして飛び出したのには後で皆で顔を見合わせて吹き出してしまった。
　この時、日本も危ないぞと何だか嫌な予感がした。
　やられたのが捕鯨船の図南丸だったので船槽がいくつにも仕切られているので逆の槽に海水をいれてバランスをとり、速度を落としながら昭南までついて来た様だった。色々の事件もあった関係と船団というものは速度の遅い船があるのでそれにスピードを合わせる為、結局宇品から昭南迄1ヵ月位かかったと思う。
　なお、途中の台湾の高雄に寄港した時、見習士官は上陸させて貰ってパパイヤを買って帰って大変美味しかったことを覚えている。

◎　シンガポール（昭南）の生活
○　昭和19年2月15日
　いよいよ、船はシンガポール（昭南）の港に入った、船上から見るシンガポールの光景は日本と全然異なり、先進国の様な街の様子が目に入り、日本も凄いものだ、ここが我々の勢力圏になったのかと思うと、単純に何となく嬉しくなった。
　波止場の岸壁には半袖半ズボン戦闘帽姿の日本の将校の姿が見え、内地では見られぬ姿

に本当によくぞ遠くにきたものだと感じた。いよいよここで一緒に来た船団の師団と別れ、我々６人の見習士官は下船。昭南へ上陸、１ヵ月振りに大地を踏むことが出来た。
○　街の中心にあったと記憶するが南方燃料廠の本部に直ちに行き上官に申告、この本部は大きな建物で会社の事務所に行ったようで、これで俺も『おいちにー』の兵隊生活にお別れが出来ると嬉しくなる。
　かくて、本部には各地から見習士官が来ており、各支廠（ジャワ、スマトラ、ボルネオ、ビルマ）への配属が決定されるわけであるが、学生時代に蘭印踏破記を読んだ記憶から是非ジャワへ行ってみたいと思っていたのでジャワ支廠へ行きたいと思ったが、お前はビルマへ行けと言われ、たしか姫路の部隊から一緒の志水見習士官（後述するがビルマ、ペグー山脈で戦病死）のほかに他の幹候隊から来た中土、山崎、大日方、吉田見習士官と私の６名がビルマ支廠に配属となりいささかがっかりする。
○　昭南では３週間にわたり石油関係の教育が実施され、その間の宿舎はホテルと思いきや南兵舎にとめられ内心むくれてはみたものの軍隊では如何んともし難し。
　この南兵舎の近くにタイガービヤーの工場があり、なかなか静かなよい場所のような気がした。この南兵舎である日北大予科時代の水泳部の佐々木洋君と会った。その偶然に驚くと共に、街へ一緒に一杯のみに行ったのも楽しい思い出だ。この南兵舎はたしかオーチャードロードをずっと郊外の方へ相当車で走ったところと記憶している。
○　この昭南に居る３週間というものは昼間の教育が終わると南兵舎の門限まで毎日シンガポールの街をうろつき飲み食いして遊んだのがせめてものなぐさめだった。ビルマは物価が高いから現金を持って行っても損だと言われ、持参の現金 800 円～900 円をほとんど飲み食いに使ってしまい、品物を買ったのは 10 円位のゴムのサンダル一足だったと記憶している。
　ある日、志水君と二人で場末の映画館に入って見ようとしたら、（華僑支那人の経営する映画館と思う）切符は買わなくてよいといわれ、中にはいったら別に椅子を持ってきてかけさせてくれ、その上、支那人が大きなうちわであおいでくれるのにはびっくりすると共に、戦争に勝っているとえらいものだと思った。これが逆になれば大変なんだと思いながら、二人でわからぬ映画をただ何となく 20～30 分位見て帰った事もあった、
○　また、ある日、軍の売店に志水君とひやかしに入っていったところ、志水が「おい上原、ちょっと来てくれ」というので「なんだ」というと「あそこにきれいな姑娘ｸｰﾆｬﾝ（可愛い 15～16 才位の女の子だったと思う）が売子で居るから何か買いたいから一緒に行ってくれ」というので「馬鹿野郎、それくらい独りで買いに行け」と言ったが、恥ずかしいから一緒に来てくれというので付き合ってやって彼が何かを買っていたので、折角だからとそこにあった磁石を私も買ったが、この磁石がビルマ撤退の時の命拾いの助けになろうとは神のみぞ知るで、この時は全然私はわからなかったが当然のことである（後述）。尤もこの志水君は姫路から一緒で気のよい男で何かにつけいつも私を頼りにしてくれていたのに、あのビルマのペグー山脈の中で死んでしまい今はもういない。内地に私が帰ってから暫くして、たしか彼のお姉さんが私を訪ねて来て、色々話を聞かれたが本当に申し訳なく気の毒でならなかった。
○　シンガポールの港のそばのホッケー場の処にクラブハウスがありそこで志水君と二人でアイスクリームを食べながら外を眺め（子供の頃の神戸の東遊園地を思い出す景色）、シンガポールは立派なところだとか、このグランドでスポーツがしたい等と学生時代を思い出したりしたものだ。

マーケットストリート、オーチャードロード等、まだその当時の名前を覚えているのも不思議だ。オーチャードロードへの入口付近の教会、及びその庭の青い芝生、Cathy Hotel 等も覚えている。

昭和 40 年に東南アジアへの単独出張でシンガポールに宿泊したが、旅行社が予約してくれてあった Hotel が偶然にその Cathy Hotel で昔の教会も見られたし、昭和 19 年に見たシンガポールの街が余り変化なくある程度思い出され本当に懐かしかった。

○　時々出掛けたシンガポールの軍の売店である日ショッピングしていたら、顔が黒ずんできたならしい将校が来ていたが、これは輸送船が潜水艦にやられ、海上に放り出されると重油の洗礼を受け助けられてもこのように黒ずんで人間の顔色がなくなってこうなるのだと聞いて、今更のごとく、カムラン湾で図南丸がやられた時の事を思い出し、ぞっとした。

○　当時酒保の食堂でビールを飲むと一升ビン 1 本のビールが 2 円で日本では街で好きなだけビールが飲めなくなっていた頃だったので嬉しくてガブガブ飲んだ。ただし、味は勿論内地のより劣る。

また、ある日、街の食堂で軍医中尉か大尉だったか二人連れの将校から声をかけられ、「北大の上原と違うか」と聞かれ、そうだというと、彼等は北大医学部出身で、私が野球部だったので小樽高商戦を応援しているので覚えていると言われ驚くと共に嬉しかった。今その二人の名前は忘れてしまって申し訳ない。

○　ビルマに一緒に行く事になっていた山崎見習士官と同じ幹候隊から来てジャワかどこかに配属の決定している松原見習士官？とも仲がよくなり、シンガポールで一緒に遊んだが、彼はたしか早稲田の専門部卒だった。彼の兄さんが司政官で昭南に来ていたので一日山崎君等とその宿舎に招待されたが、接収した家は実に立派で、随分御馳走になり、ことに色々のおいしい果物が珍しくもあり特に嬉しかった。ブキテマの丘にある有名なフォード工場の山下大将と英軍のパーシバル将軍との”Yes”か”No”かの場所を見て感激したものだった。ジョホールバルとシンガポールとの間の橋を渡る時、内地でシンガポール陥落のニュースで銀輪部隊が走る姿を見たが、それを思い出して遥か遠くに来つるかなと思った。

◎　シンガポールからラングーンへ

○　南方燃料廠の本部における見習士官の石油に関する 3 週間の教育期間も終わり、いよいよ任地へそれぞれ赴任することになり我々 6 人（中土、山崎、吉岡、大日方、志水、上原）は泣く泣くビルマ支廠行の命令をうけとり、ラングーンに向け出発する事になり、シンガポールの駅からバンコック行きの国際列車に乗り込み、バンコック近くの泰緬鉄道（日本陸軍が幾多の犠牲を払い完成した）との分岐点で乗り換え、そこから貨物列車（軍用列車）でモールメン経由ラングーンに向うことになった。シンガポール出発の時は前述の松原君等がわざわざ見送りにかけつけて激励してくれたのは今も忘れられない。シンガポールの駅は大きいが何だか物静かな駅のような気がした。昭和 40 年にも行ってみたが、全く同じで一日の列車の本数が僅かなのでガランとしているのも無理はない。

○　かくて国際列車は一路北へ向かうがジョホール水道をわたり北へ北へと進み、クアラルンプールの駅で停車して屋根のないプラットホームで大日方君がバナナを買って飯代わりにしていたのが未だに鮮明に思い出されるのも不思議。

しかし、我々は軍の暗号電報の解読書を本部からラングーンの支廠に届ける様に持たされているので、6 人で交代で腰にくくりつけ何だか責任が重大でおちおち出来なかった。

○　列車がその分岐点に着いたので下車。早速そこの兵站司令部に行き、そこからビルマに向う列車に乗せて貰うべく打ち合わせしたところ、１５輌位の軍用貨物列車に一輌貨車の空車をつけるから見習士官6名で乗っていってくれとの事。尚５～６輌にビルマの軍票（日本運の発行した紙幣）を満載しており、軍属が一人で宰領者になっているので頼むと言われ、なお残りは全部燃料（ドラム缶）だと言われ、途中泥棒があるから是非守ってやってくれと言われ、これはえらい事になったわいとお互いに顔を見合わあせたが、これも運命と観念する。

なお、駅へは捕虜（英人）に将校行季をはこばせるといってくれ、トラックで運びに来たのはパンツ一枚の英国の捕虜だったのには驚くと共に、哀れに見えた。片言の英語でしゃべったところによると、ロンドンに住んでいた連中らしく、タバコをやると非常に喜んでいたが戦争に負けるものでないとつくづく感じた。

○　列車はその分岐点から出発したが、なるほど凄いところに線路をつけたもので、暑いので貨物列車の扉を開け放しで、足を外に投げ出して寝転んでいると、河の崖に沿って敷いてある鉄道線路XXがその土手にぶつかりそうだった。

最も驚いたのは列車のボイラーの燃料は石炭ではなく薪だったこと。大きな火の粉が飛び散って気が気でなかった。

戦後、映画で見た「戦場にかける橋」の”カンチャナブリ”も通った筈であるが、地名は全然覚えていない。各駅に勤務の兵隊が駐屯しているわけだが、数人いる駅もあれば一人の駅もあり（或いは２人なのかもしれぬが-----）全くよくこんなすごい所を切り開いて鉄道を敷いた日本という国も大したものだが、この工事のために死んだ人は気の毒な話だ。

水のある駅で汽缶に水を一杯にし、それから一つないし三つ位の小さな駅で（水のない所）ボイラーからお湯を少しづつぬいて、その駅の飲料水にあてていたようで、次の水のある駅では水を補充して走っていた。また、そんな山の中の駅に列車がつくと、どこからともなく原住民の子供が出て来て、物珍しそうに我々を見ていたが、我々の方も珍しくて仕方がなかった。

戦後、この泰緬鉄道がなくなってしまったと聞き、もったいないと思う。

○　かくして列車は泰緬国境を抜け、ビルマの都市モールメンに着き、ここからは既設のビルマの鉄道で客車に乗ったと記憶する。

モールメンからラングーンへ向かう途中で駅につくと停車時間も長く、野原のような小駅についた時、水を一杯入れた甕を頭にのせ、イエ　イエ（ビルマ語で水のこと）と叫びながら水売りがくるので、それに10銭位払い、その水を使って歯を磨いたり、口をすすいだり、顔を洗ったりした。またオコアオコアと葉っぱに包んだものを売る女の子がいるので何だろうと見ると、これが赤飯で、誰に日本のオコアなる呼び名を習ったのかほほえましく思った。（ビルマのお米はおいしい。）服装はビルマ人特有のロンジー姿で最初は日本の腰巻を思い出し、変な気がしたものだ。

（以上、昭和49年10月11日までに記す）

◎　ラングーンでの生活

○　ラングーンに到着したのは昭和19年3月12日と思うが、直ちにビルマ支廠に行き申告す。

ビルマ支廠はビクトリア湖畔の森の中にあり、実に環境の良い所で、事務所は数戸の建

物にわかれ、支廠長官の棟、総務・企画の棟、経理・資材の棟、少し離れて炊事場、自動車の修理工場、兵隊の宿舎等があったと思う。将校及び軍属はビクトリア湖畔の、むかし英人が住んでいたと思われる邸宅に分宿し、我々見習士官は見たところ湖畔の豪華な一つの邸宅を与えられ、右隣には将校クラブがあり、左隣には軍属の宿舎があったようだが、もちろん日本内地のように屋敷がくっついている訳でなく、ぐっと離れてある訳で、声も聞こえず姿も見えずというお隣さんである。また、湖の向かい側に部隊長宿舎があり、副官（神田中尉、５２年１月東京で死亡）が一緒に住んでいたと記憶する。

燃料廠は井桁の中に日の丸マーク●を用いていたので、土地のビルマ人には日の丸部隊で名が通っていたようだ。

○　我々見習士官６名が着任した頃は女性の軍属が傭員として内地から来て事務をとっており、こんなビルマまで日本の女性が勤務に来ているのには驚かされたが、軍隊とはいえ事務所に来たようで、ちょっと会社勤めしているような気になった。

この頃は日本が東南亜を制覇していたので時間はすべて日本時間をそのまま使用していたので、勤務の時間は午前 10 時から午後６時か 7 時迄で、昼寝の時間が１時間から２時間位あったと記憶している。本来なら時差が２時間位あるはずだから、午前 10 時といっても日本では午前８時になる勘定である。我々の宿舎と事務所の間は歩いて 5 分位の距離で、昼休みは宿舎に帰り、飯を食い、水を浴びたものだ。水浴びはたしかマンデーといった。

○　宿舎の使用人には水汲みと庭掃除はインド人の苦力がおり、飯炊きや部屋の掃除はビルマ人の子供が２人いたと記憶している。

英領時代の英国人のしつけで、苦力は絶対部屋に入らず、部屋の中の仕事はすべてビルマ人のボーイがやり、仕事の分担は歴然とわかれ、我々日本人の感覚とは少し違うので、最初はいささかとどまった。

彼らビルマ人は生活必需品に困るらしいので、我々の石鹸を稀に分け与えると物凄く喜ぶので、飯やおかず（これは炊事場から自動車で食缶で運んでくる）が余るから、家に持って帰れというと、彼等はバイナーレ（腹痛）という。何かと思うと、日本の兵隊の飯を食べると腹痛になるというので、この野郎と思ったが、配給の飯はものすごく不味い（おいしい筈のビルマの米なのに）。これは経理が安い古い米を買い付けるためで、現地のビルマ人はこんな家畜のエサになるような米を食わぬらしく、それではと我々も別に米を買わせてそれをたかせて食うことにした。（月給 90 円の内、一カ月の米代として 20~25 円必要になったと思う。）これは実に美味しかったが、ただ最初にびっくりしたのは飯のたき方だった。

彼等に飯をたかせると、土鍋でたくのだが、大分ぐつぐつ煮えてきた頃、重湯をすててふかすので飯にねばりがなくさらさらになるのでびっくりしたが、これは彼等が飯を手で食べるからで、二度目からは重湯をすてずにたかせたが、彼等には理解できなかったらしい。

○　ビルマ支廠における部署の決定されるまで、少し色々教育されたとも思うが、その間ラングーン市内に飲みに出掛けたりした。だいたい私の頃は高専出は大学出と違って日華事変が大分進展してから専門学校に入学しているので、余り酒等豪勢に飲みに歩く事がなかったらしく経験がないにので専ら私がリード役。ある日ラングーン市内の将校クラブ（内地の料理屋）へ行こうと燃料廠の車を借りて街に行きビルマ人の運転手に手まねで三味線を弾くかっこうで料理屋の場所を聞いたことろ、やっと理解出来たらしくその将校ク

ラブの所へ案内してくれた。見習士官ばかりで座敷にあがり込み、芸者を呼んで騒ごうとしたら、女将が入ってきて、貴方がたは見習士官でしょうという。そうだが、それがどうしたのだと聞くと、実は森方面軍には辻参謀というこわい人がいて、見習士官が将校クラブで飲んでいるのがわかるとえらい目にあうから帰った方がよいという。私は何を言うか、士官勤務の見習士官はれっきとした将校なのだからそんなものこわくないといって頑張ったので、女将はとにかく今晩は飲んで行かれたらよいがこれから余り来られない方がよい等といわれた。この時、部屋に来て一緒に騒いだ芸者達と将来エナンジョンから撤退する時に燃料廠の他の連中が男装して逃げる彼女達を助けた事があったが、不思議な運命と思う。恐らく彼女達は全員撤退時に死んだと思う。戦争の犠牲者だ。また、後日、有名な辻参謀の話を聞いて、今更のごとく驚いたものだった。

○　かくて我々見習士官の配属すべき部署が決定される事になり、私は実験室の仕事がしたかったので、シリアムのラングーン製油所勤務になりたがったが、支廠長の松田中佐（灘中の配属将校をした事がある由）がどうしても本部で企画におれというので残念ながらシリアムには行けず本部に残ったが、秋田鉱専を出た佐藤宏一見習士官が採油関係を、私が製油関係を担当する事になった。姫路からずっと一緒だった志水君はエナンジョンの製油所勤務になり、私と別れるので淋しそうだった。山崎君はラングーン製油所、中土君はモールメン出張所、大日方君は資材課勤務となる。

教育期間中、シリアムの製油所にも一週間程行って試験室の仕事をしたが、石油の性状テスト等行った。現地で試験室で働いているのはほとんどハーフ（混血児）で、英語がしゃべれるので、色々片言でしゃべったり、分からなくなると筆談したりしたがシリアムでの実習期間は勤務の日本人が皆軍属なので気が楽で面白かった。

このシリアムの製油所長は朝鮮石油から来られた岡本さんで終戦復員後三共油化におられ、色々お世話になった。また、この実習の手伝いをしてくれた小林慧氏は当時判任官だったが、非常に仕事のできる人だと思ったが、今は大協石油の常務として活躍中である。堀部順平氏も小林氏といつも一緒で、この人も大協石油四日市製油所勤務だったのでずいぶんお世話になった。

この製油所のそばに戦前英人が利用していたゴルフ場があり、製油所の岡本所長等はゴルフ等やっていたように記憶している。

シリアムのこの製油所にはローソク工場があり、ローソクがふんだんに使えた記憶もある。（ローソクのお蔭でラングーン本部の我々は大変便利で得をしたものである。）　また、製油所の中を見学していた時、ある装置のそばにクラフト製の粉体があったので質問するとそれは酸性白土で日本から来ていたものだと聞かされ感心したものだったが、私が昭和22年に今の日本活性白土ＫＫ青梅工場試験室に勤務した時、引き出しの中にそれに使った印等があり、日本活性白土からビルマにも輸出していたと聞きびっくりした。まさか私がビルマにあった酸性白土の製造工場に勤務するとはその時は考えもつかぬ事で、運命というものは人智でははかり知れないものである。

ところで、このシリアムの製油所へはラングーンの北約660キロにあるエナンジヨン油田で採油したものを12インチのパイプで送油して来てはじめてここで製油が出来、製品となるわけだが、この時は未だ山からの原油はここシリアムに到着していなかった。

ここにはエデレアス（？）の溶剤精製のプラントがあり、東条首相の厳命でこれを解体し、ボルネオ燃料支廠へ送ることになっており、製油所の小林、堀部氏等が一生懸命図面をかき、解体作業にあたっていたと思う。ところが終戦の頃、これは未だシンガポールの

港にあり、計画と実行は全然かけ離れていると思った。
○　前述の我々６人の見習士官がラングーンに着いた時には他の部隊から来ている見習士官が既に来ており、見習士官への教育が終わり、部署が決まって本部に残ったと記憶にあるのは次の通り位と思う。

庶務　　茂呂、中村
企画　　上原、佐藤
資材　　大日方、車？（大阪外語出）
経理　　田中
歯科医　眞行寺　（吉井姓で秋葉原で開業、53 年 9 月 29 日死去）

この見習士官で前述のビクトリア湖畔の宿舎に寝起きする事になったと思う。
この本部に勤務していたビルマ人の男の子、女の子の給仕は皆、日本語が上手で日本語学校に通ったりして一生懸命日本語を覚えるようにしていた。
また、女の給仕で美人でおしゃれなのはロンジー（日本の腰巻のようだが、もちろん外出着）を一日に５回も６回も履き替えるのがいて、どこの国でもそれぞれの服装に応じてやはりおしゃれの仕方があるものだと感心したりした。
○　我々の企画科に雇っていた男の子の給仕はたしかモンテモン（モンテオン？）といい、少しのんびりしているようだが、なかなか良い子で、日本語学校にも通ったりしていたようで、謄写版を刷らせたりすると、下に敷いてある日本語の新聞紙の漢字を見ながら、読めない字はいつも質問していた。未だにはっきり覚えているのは”上原少尉殿、車三つ書いて何とよみますか”と聞かれた事で、これはとどろくと読んで大砲の音がずどんずどんと響き渡ることだというと、何故ですかと聞くので、恐らく車三つ走るとごうごうとすごい音がするからだろう等と苦しい答弁をしたのも懐かしい、今頃彼は 45~46 才になっていると思うがどうしているかしら-----。
○　たしか 4 月の 10 日はビルマの最大の祭り”水祭”でこの日は頭から水をかけても叱られない日とかで殊に女の子が若い我々見習士官に水をかけて喜んでいたのも懐かしい思い出だ。とにかくラングーン市内に出るとホースで水をかけたりするのがいて、戦争中とはいえ、和やかな一時だった様に思う。
燃料廠の事務所のある森はマンゴーの樹が多く、マンゴーは大木で、たしか６月頃？はマンゴーが鈴なりになって私達は随分食べたが随分おいしいと思った。ただ、女の子は食べるとニキビが出るから食べない方がよい等といわれ、日本の女子事務員の中にはセーブしていたのもいたようだ。
夜警のインド人（ダラワンという）は夜廻りしながら、しこたまマンゴーを採っていたようだった。夜警で思い出したが、ターバンを頭に巻いたインド人を夜警に雇っていたが、我々はインド語は皆目わからぬが、大阪外語出の車見習士官はインド語を専攻していたので彼が専ら通訳になって重宝な事もあった。彼は宝塚の先の武田尾の旅館の息子で、エナンジョンの油田に敵が入って来た頃、行方不明になっていたが、戦後私が復員した直後、留守宅の妹さんが私の不在中に訪ねて来られたので数日後その旅館を訪れ、彼の消息について彼の母親及び妹さんに説明したが、彼が帰還していないので申し訳なくて仕様がなかった。
○　私達がラングーンに赴任して何ヵ月位たったか忘れたが、ビルマ戦線も風雲急を告げて来たらしく、日本人の女子事務員はラングーンを引き揚げて昭南に帰すことになったが、上層部ではもうこの頃は日本の不利については大体わかっていたのだろう。また、こ

の頃だったと思うが、南方燃料廠ビルマ支廠がビルマ燃料工廠と改組され、たしか森方面軍（ビルマ方面軍）の直轄になった様に思う。
　それで新しく内務規定を作成する様に神田副官に言われ、色々の服務規程を山の如く宿舎の机に積み重ね、夜も研究し、ビルマ燃料工廠の内部規定を作り上げたが、今から考えるとこれもよい勉強になった。
○　本部の私の仕事は企画科で森軍の命令にもとづき採油、製油の命令原案を書いて部隊長に見て戴いて発令する訳だが、シリアムのラングーン製油所の岡本所長に製油命令を出すので、予めその内容を岡本所長に事前に話すと、そんな事いくら命令されても出来るものかと一蹴される。こういう時には何とか頼みますと頭を下げるばかりで幹候上がりの見習士官の情けなさをつくづく嫌になる事は再三再四あった。
○　昭和19年の天長節（4月29日）が近づいた頃、山下少佐という少尉候補者上がりの人が部隊長の次席としてやって来て、これがまた、話のわからぬオッサンでちょびひげをつけ品もなく、弱った事が再三あり、むかっ腹をたてた事がよく持ち上がったが、何ともならないので残念だった。ビルマ撤退作業中ペグー山脈の山の中でこの少佐と大ゲンカ（論争）する事件があったがこれは後述する。
　たしかこの天長節の祝賀の宴がビルマ支廠の将校集会所で正午から行われ、４時頃迄ビルマの貨物廠の作ったすっぱい日本酒で大騒ぎをして炭坑節まで踊ったのを覚えているがこの話の分からぬ山下少佐は大学の頃にそんな踊りまで覚えるのかとびっくりしているのには兵隊上がりの将校の頭はこんなものかとこちらが驚く始末。
　なお、この日の宴会の後宿舎でベッドにごろりとなっていると、丸子さんという企画科の軍属（高等官）がもっと飲みに行こうと誘いに来たので、それから直ぐ隣の将校クラブに出掛け、夜の12時迄5人で6本のブランデーを飲み騒いだので、女の連中にこの悪いビルマのブランデーを頭数より余計飲んだグループは初めてだと言われたが、若さというものはこわいもの。次の日はさっさと軍務についているのだから。
　この丸子さんは確か拓大出身でどこか商社に勤務していた人で非常にきれいな字であらゆる向きに大変お世話になった。一見おそろしいが、なかなか芯のある人だった。終戦後どうされているか音信不通で残念なり。
○　いつ頃か月日ははっきりしないが松田中佐がどこかへ転任され28期の鳥居大佐が着任されたが、相当の年配で仲々の好々爺だった。”28期で未だに大佐なのだから俺は出来が悪いのだ”と自分で公言してはばからず面白い人だった。だから森軍から難しい命令がくると、俺にこれが出来るなら今頃大佐なんかに留まっていないよなあ、上原と言う等愉快な人だった。
○　休みの日に宿舎の前の広場でビルマ人がサッカーに興じていたが、はだしでサッカーのボールを蹴るのを見て、彼等のつま先の強さにはびっくりしたが、宿舎のボーイが我々とはだしで競争しようと駆け出したところ、ものの20～30メートルも行くと暑さで地面の温度が高いので、我々の皮のうすい足ではとても耐えられず降参したこともあった。我々都会で育った日本人ではとても太刀打ち出来るものでなく、はだしで悠々と歩く現地のビルマ人にはただ感心するばかりだった。
○　宿舎の直ぐそばに小さなお寺があったが、ビルマの人達はその境内に入る時には皆ぞうりを脱いではだしになって入るのでびっくりしたが、私達は勘弁してもらった。あの有名なラングーンのシエダゴンパゴダの境内に入る時は必ず軍靴をぬいではだしになるようにとの森軍（ビルマ方面軍）からの通達があったので、はだしに迄なって入る意思のな

かった私はついにその境内に入らずじまいだった。
　同室の大日方君がパゴダの写生に行くのに付き合ってくれと言われたが、はだしになるのが嫌で終に私は付き合わず、彼一人で出掛け写生して帰ってきたこともあった。彼は今長野市に住み、県の家具関係の仕事をやっているようである。
○　ラングーンの海事局に北大工学部の先輩で軍属に来ている人とどこかで偶然あった（今は名前を失念）が、ある時二階堂孝一君（北大野球部の友人で当時ラングーンから離れたどこかの淋しい所の守備小隊長）がその海事局にあらわれ、彼は北大出身ということをが分かり、その先輩が私のことを彼に教えてくれたので燃料廠の事務所へ電話がかかってきたので、さっそく私が街に出掛けて行き、彼とおでん屋”お多幸”に行き、そこで昔をしのび、二人で大いに飲んだ。ビルマの地ラングーンで昔の野球部の親しいのに会えるなんて本当に不思議であり、嬉しかった。
　彼は田舎の守備隊長で金を使う所がないからお前の飲み代に貢いでやると言って持ち合わせのビルマ軍票で200円位おいていってくれたのは有り難かった。また、再会を約して別れたが、数ヵ月後、海事局の先輩からの電話で、先程二階堂君が立ち寄り、今から勇兵団（仙台の師団）は雲南の方へ発つが、ラングーン駅を午後３時に出るということだったので時計を見ると何とか間に合いそうなので事務所から車をとばし駅についたら 3 時 15 分前だった。
　やれやれあ間に合ったと思ったが、どうも部隊らしき姿はなく、キョロキョロしていたら、下士官が一人近づいてきて、どうしているか聞くので、実はこうこうで見送りに来たのだといったところ、それならば防諜上まずいので午後３時といったが実は２時に出発した、私達は残務処理で後片付けしてから部隊をおっかけるのだと聞き本当に残念だった。復員後、彼が雲南の地で戦死したことを知り、あの”お多幸”での再会が最後だったのかと思うと本当に悲しい。
　また、海事局のその先輩から私の消息を聞いて、海軍の予備学生になっていた梅本君（北大の一年下で水産学科出身で予科のころ学内対抗の野球の時、上手だったと記憶している）が来てくれて、彼は海軍なので色々品物が豊富で煙草等もくれたが、彼も戦死したらしく淋しい。

　昭和19年７月１日付、任少尉。
○　任官してラングーン市内の将校クラブで飲んでいたら、大日方君が北大の”都ぞ弥生”を歌おうというので皆で”都ぞ弥生”を高唱していたら、別の部屋の女中が今の歌を歌っている人に自分の部屋のお客さんが会いたいから来てほしいと言っていると呼びにきたので”馬鹿を言うな、用があるならそちらから来い”と伝えさせたところ、しばらくすると現れ出たのが、中尉さんで、何と北大の農芸化学の４年先輩の（昭和 14 年卒）成田明人さんという人で恐縮したが、貨物廠勤務だったので、お蔭でその後は煙草や酒を貨物廠にもらいに行けて幸いだったが、戦後も日本油脂の尼崎工場のすぐそばの岡本鉄工所におられ、現在岡本姓を名乗られて社長のはずである。私が日本活性白土に入社し日油の尼崎工場に出張した時は時々お寄りしたが最近は全然会っていない。
○　ラングーンの宿舎では大日方君と同室で、一人用の寝台に一人用の白い蚊帳を張り寝るわけだが、部屋の天井や側壁の白い壁をヤモリがはいまわったり、玄関の車寄せには、たまに車のタイヤでサソリがひきつぶされているのを見たりして気持がよくないことも多かった。だから、靴を履く時にいつも一度靴をさかさにしてサソリ等が入っいないことを

確かめてから履いたものだった。また、ある日、田中君の部屋に小さな蛇が入り込み、皆で軍刀で追いかけまわして殺したこともあったが、今の東京では一寸想像もつかない。

また、宿舎の高い樹木の上の方に（15 メートル位の高さがあったと思うが）禿鷹があらわれたりするので、散弾銃を大日方君が資材倉庫から持ってきて、たまにドカンと撃って驚かそうとするが、悠々としているのでかえってこちらが気持が悪くなることもあった。

また、この散弾の弾がパラパラと隣の軍属の宿舎の外のトタン屋根に落ちてくるから、”少尉殿、やめてください”と小島という小太りの経理の軍属さんから言われて済まん済まんと誤ったこともあった。

○　日本人は夜、現地のビルマ人の家に行ってはいけないということになっていたが、軍属達はよく事務所に働いているビルマ人の子供の家に出掛け、色々家族の人達としゃべったりして、内地の家族の事や生活を思い出していたようだったが、私達も稀に誘われて行くと、それこそ家族の全員がもてなしてくれて、私達がお茶も飲まず何も食べないと現地人はかえってご機嫌が悪いから一緒に御馳走になった方がよいというので、それではとこちらも少し手をつけてお茶を飲んだり豆を食べたりすると本当に喜んでいるようだった。しかし、その当時、彼等の本当の胸の中はどんなだったのか、聞けるものならば聞いてみたい。

街へ出たついでに、ラングーン大学を見に行ったが、静かな環境のよい大学に思われたが、どうも記憶は定かではない。唯、赤れんが作りの建物があってやはり英国風の様な気がした。

○　戦争もいよいよ熾烈になってビルマの前線の雲行きもだいぶ怪しくなってきたのだろう、よくコンソリデーデッド B24 がラングーン市内の爆撃に来だしたが、敵機が来るとパッとサーチライトが敵機をとらえ、高射砲隊が打ち出すので最初の間は面白くて防空壕の中から”やれやれ”、”やっつけろ”等と見ていたが、なかなか弾丸は命中せず残念に思っていたが、一度だけ命中して市の郊外に墜落するのを見たが、やじ馬はさっそく現場にかけつけて、チョコレート等の戦利品を持って帰って来た者もいたようだ。

（昭和 49 年 11 月 11 日記）

○　企画科にいたお蔭で、南方燃料廠の本部及び他の各支廠（ジャワ、スマトラ、ボルネオ）の命令の写しをいつも見ていたが、ある日の写しで北大の農芸化学のクラスメートの松実成忠君がスマトラ支廠に配属されていることを知り、非常に懐かしく思うとともに、うまく出張ができればと思ったが、ついにそのチヤンスはなかった。

また、ある日ビルマ支廠に配属されてくる軍属の名前が出ていたのに、北大時代のスキーの亀ケ森隆君（ジャンプで全日本チャンピオンで北大理学部地質科卒）がビルマ支廠の地質科の判人官として配属されてくることがわかり、彼の来るのを楽しみにしていたが、数日後彼が現れ副官に着任の申告をしている姿を見、たいへん嬉しかった。

しかし、彼もエナンジョン油田から撤退中、ペグー山系で戦病死したはずで、残念でならない。日本のナンバーワン・ジャンパーもマラリヤ、アミーバ赤痢には勝てなかったのだ。

○　ビルマ燃料工廠の本部がまだラングーンにあった昭和 19 年の前半、あるいは夏頃だったかもしれぬが、ある日ラングーンの発電所を運転していた所長（中部電力が業務に当たっていたので、この所長は中部電力の社員だったはず）が本部に来て、日本の海軍力が低下したためか、発電所の燃料として使用している石炭が入荷しなくなり、あと２週間

～１ヵ月位で発電不能になりラングーン市内の電気が消えるから何とか重油を配給してほしいと要望された。

当時ビルマにおいては燃料廠の採油量は 30 万キロリットル位と記憶していたが、何しろ自動車廠にわたす燃料も不足し、重油はもちろん、燃料廠の自家燃料で手一杯の状況で軍から民間に払い下げる等ということは到底考えられなかった。

しかし、わたしは企画をやっていたので、ビルマ方面軍からの命令及び南方燃料廠の本部、各支廠の月報は目を通していたが、たしかスマトラの燃料工廠では、航揮、自揮の生産が灯油タンクの灯油が満杯で不能になり、ガソリンが必要なため致し方なく不要の灯油を河に流し火をつけて燃やし、ガソリンの生産を可能にしたとの報告が頭に浮かんできた。ビルマの採油量は少ないとはいえ、ビルマでも当然同じ事態が起こるかもしれないし、また、たとえ起こらなくてもそういう理由づけをして灯油ならば電力会社に渡しても燃料廠（軍）としての大義名分もたつし、ラングーン市内がそれで灯が消えなければ幸いと考え、一応発電所の設備を見にいったところ、大きなバブコックのボイラーが相当数並んでいた中部電力の人にそのボイラーで灯油を焚けるようにならぬかと言ったところ、改造すれば燃やせるとのことだったので、それでは部隊長（ビルマ燃料工廠長）を何とか上手に説得するからといって本部に帰り、部隊長（当時は松田中佐と思ったが）に上手に話し込んだところ、私の案に賛成してくれたので、早速中部電力の人に灯油配給命令を出すから、ノズルをうまく改造するように話し、ラングーンの灯を消す必要がなくなった。

中部電力の所長以下たいへん喜んで、部隊長以下将校全員に御馳走したいと言ってきたので、私は、軍としてもラングーンの電気が消えるのは困ることだし、すべて国家の税金でやっている軍のものだから遠慮することはない、決して御馳走などする必要はない、されるとかえって迷惑だからと独断で断ったのだが、その件を部隊長に報告したところ、たいへん喜んでくれたことを今も記憶している。（部隊長の松田中佐は灘中の配属将校をしていたことがあり、私が神戸一中だったのでたいへん懐かしがって可愛がってくれた）。

当時、私は技術将校の代用品として北京の自動車教育隊（途中で保定幹部候補生隊に編入された）を卒業と同時に見習士官として燃料廠に来たのだが、そのために石油精製、ボイラー、その他の専門書を内地から取り寄せて事務所で手のすいた時、そんな技術の本を読んだりしていると、少尉候補生上がりの作井中隊長の阿部大尉につまらん本を読んで戦争に役立たぬ等と決めつけられたが、腹の中で陸軍とはこんなのが将校だから、海軍と比較するとどうしても見劣りがするのだと感じた。現地の三井物産等に勤務していた大学出の社員の人達と何かにつけ仲良くしゃべっていたので、副官に、上原、お前は地方人と仲良くしすぎると言われて、軍というところは何と馬鹿な奴等のいるところだわいと腹の中でせせら笑ったものだった。（昭和 49 年 12 月 18 日記）

○　週番士官勤務についていたある休日、燃料廠の近くの屋代の店で食い逃げしたと現地人が騒いできたので、資材課にいたビルマ人の女事務員（あるいは女給仕か）で日本語の堪能な女の子がいて（名前をチチイエといったか？）、これを通訳にして屋台で色々話を聞いたところ、どうも軍属が少し酒に酔ってコーヒーを飲んで金を払わずに行ってしまったという事なので、一応謝ってやって代わりに代金を支払ってやったが、その時ビルマ人の屋台の主人が喜んでコーヒー皿に乗せたコーヒー茶碗に山盛り一杯コーヒーをついでくれたが、飲まずにいたら通訳をしてくれた女の子がぜひ飲んでやってくださいという。そ

の時聞いたことだが、ビルマの現地人はコーヒーを茶碗からコーヒー皿にうつして飲むのだという。
何故かと聞くと、英国人は自分達はカップから口をつけて飲むので、現地人には口をつけさせず、皿に移させて皿から飲ませたのだと彼女は私に説明してくれたが、もし本当とすれば白人なんてひどい奴等だと思った。
　この時通訳してくれた女の子もそうだが、ラングーンでは日本語学校で日本語を勉強する人が多いので、燃料廠の事務所に勤めていたビルマ人は皆、日本語がたいへん上手だった。
○　経理の泉山主計中尉が病気をしてラングーン病院に数日間入院して退院してきたとき、”上原、君を知っている植田中尉が隣のベッドにいて、色々君の事を聞いていた”と言われたのでびっくりした。植田中尉は姫路の中部五十四部隊の初年兵の時の中隊長で、姫路師団が兵（ツワモノ）兵団としてビルマに派遣される時、自動車隊の中隊長として出掛け最初の初年兵教官だった遠藤少尉も皆ビルマに来ていることを思い出し、懐かしさと共に、私の事をよく覚えてくれ私を可愛がってくれた人なので、経理から大福餅をわけて貰ってラングーンの陸軍病院に見舞いに行ったところ、物凄く喜んでくれた。植田中尉はたしか陸士５５期だったと思うが、なかなか太っ腹の快男児のように思われた。ただ、この時面白かったのは、森の中にポツンポツンとある病室を探して、教えられた小さな棟の前に行って植田中隊長殿おられるかと外から声をかけたところ、中から出てきた一等兵が敬礼をして”上原少尉殿でありますか”と言われたのにはびっくりしたが、これが何と初年兵の時の隣の班で志水君の助教をしていた古兵（名前は忘れたが------）だったのには、階級がものをいう軍隊の味をつくづく感じた。
　後日エナンジョンにいる志水にこの話をしたところ、”俺はあいつにいじめられたから殴りたかった”等とたいへん残念がるから”馬鹿野郎、つまらぬ仕返ししたかって仕様がないぞ”とたしなめた記憶がある。
　その後、植田中尉が退院、前線のアキヤブに帰って行ったが、しばらくして植田中尉から私の話を聞いたと、初年兵の時の教官だった遠藤少尉が、自動車部品の調達にラングーンに来たとかで、燃料廠の事務所に来てくれたので、さっそく市内の偕行社（陸軍の将校クラブ）へ案内して盃をくみかわしたが、遠藤教官も私がなぜ姫路の原隊に帰ってビルマの兵兵団の自分達のところへ来てくれなかったかと言われた。（森野君ともう一人が来ているとか聞いた）。私はいわゆる軍人なるものに自信がないからとニヤニヤと答えると、将校は何もしなくても下士官が皆やってくれるよと盛んに残念がっていた。
　何はともあれ、嫌な軍隊とはいえ、初年兵時代目にかけてくれた植田中隊長、遠藤教官に少しでもお礼が出来ただけでも嬉しかった。
○　ラングーン市内ではシンガポールのように余り繁華街があったとは思われなかったが（あるいは私が知らなかったのか？）、それでもある休日に、見習士官ばかりで中華料理を食べにいこうと市内の中華街のようなところへ行き、中華料理店の二階で、久し振りに志那料理を食ったが、非常においしかったとだけ記憶している。
○　当時　エナンジョン油田から毎日採油された原油をシリアムの製油所（ラングーン市の川向い）へ送油していたが、毎日その数量を部隊長に報告するわけだが、パイプの径がたしか 12 インチ、距離が約 660 キロメートル位あり、パイプが全部つまるのに原油が約２万キロリットル必要だったが、途中のパイプが敵の銃撃で破壊したり、あるいは油ほしさに現地人にこわされ油を抜かれたり、警備の作井中隊は大弱りだった。送油された原油

の総量が計算値の 2 万キロリットルを越してもなかなかシリアムに届かず、担当の我々は弱っていたが、ラングーン市内からシリアム製油所の間にラングーン川（イラワジ河）があり、雨季は温度も下がり、ビルマ原油はパラフィンが多く含まれているので固まるかもしれぬと山下少佐に気合のかけられ通しだったが、最後には何とかシリアム製油所に到着したと記憶している。

なお、作井中隊の 660 キロメートルにわたる送油パイプの警備について思い出したが、所により出身地の違う部隊と部隊の接点では電話連絡でお互いにしゃべるのだが、片や南の端の鹿児島出身、片や北の端の青森出身で両方ともお互いに相手の言葉がなかなか通ぜず、なんでもないことでも横から聞くと、まるでケンカ腰でしゃべっているようで、噴き出したくなることもあったが、懐かしい思い出の一つだ。

（昭和 49 年 12 月 20 日記）

◎　ラングーンからエナンジョンへ

○　昭和 19 年の秋と思うが（多分 10 月頃か？）ビルマの戦況、日に日に不利となり、インバール進攻もどうもうまくゆかず、本部がラングーンにいてのんびりしてはいけないから、本部はエナンジョン油田に移り、陣頭指揮にあたることになった。ラングーンは連絡所として少数残ることになり我々は残念ながらラングーンを離れてエナンジョン油田に行くことになり、ラングーンの連絡所は池田中尉が所長で残ることになる。なお、この時、部隊長は松田中佐から鳥居大佐（28 期の老大佐）になっており、先に鉱業所勤務になってエナンジョンにいた棚橋、林、志水、高橋少尉等は賑やかになるので大喜びのようだった。エナンジョンでは我々本部の少尉の宿舎は部隊長宿舎のそばにあって、事務所はイラワジ河畔だったと思う。庶務の茂呂少尉は神田副官の副官の如くなり、部隊長宿舎に住むことになり、可哀想にと思った。

この宿舎は河畔の事務所から直角にまっすぐ行った数百メートル位離れたところにあって、昔英人が住んでいた立派な建物だった。しかし、この宿舎も、いつ頃だったか引っ越して、もっと鉱業所に近い油田に近づいた宿舎に移った。この二度目の宿舎から最後はエナンジョンの撤退が始まったのであるが-------。

○　エナンジョンに移った頃、応召の大尉さん（着任当時は中尉でしばらくして大尉になったか？）が大分来られ（皆さんだいぶ年配だった）縄大尉が企画科、江崎大尉が資材課の長になられたと思うが、二人とも非常によい人だったと思う。庶務は中島大尉だったと思う。鉱業所に勤務していた並木という雇員さんが企画科に配属になったが、この人は眼鏡をかけた小さい人だったがものすごくソロバンが速く、数字に強かったと記憶している。

○　エナンジョンの本部事務所はイラワジ河のそばにあったので、ある日川沿いに敵機一機が昼間に襲来してきた時、河のほとりの防空壕の中から飛行機を見ると、岸より下を飛行機が飛んでおり、なめられているようでしゃくにさわるとともに、日本も落ち目かなと感じた。

○　エナンジョンはさすがにラングーンのような大都会と違い、燃料廠の各事務所に勤めている女の子はラングーンの時と違い容姿が大分田舎くさくて、日本でも都会と田舎の差があるように、ビルマでも同じだなあと感じた。

○　ある日の空襲で本部からラングーンよりのところにあった貯油タンクの辺に爆弾が落ちてタンクが燃えだし、鉱業所の林少尉達が陣頭指揮で消火活動をしていたのが目に浮か

ぶ。
　また、防空壕がつぶされて、その中に数人が埋まり、皆でくずれた土砂を取り出すのに、危なくてスコップが使えず、食器で砂をかき出す等、大弱りした事もあった。
○　エナジョンは田舎なので、都会で育った私はやっぱり都会のラングーンに行きたくてラングーンに出張を命ぜられた時は嬉しくて、ラングーンでは将校クラブに飲みに行ったものだ。
　ラングーンの事務所からの帰りに、ちょうど部隊長の車が修理に来ていて帰りは空車なので、私が一人でそれに乗っかってエナンジョンに帰ったことがあったが、当時は日本の軍の車は昼間走ると敵機に銃撃されるおそれがあるので、夜のみ走り、プロームまで一晩で走り、昼間は休憩し、夜になってあまたプロームからエナンジョンまで走るわけだが、ラングーンからエナンジョンまで約 660 キロメートルあり、夜走ると、部隊長の運転手の坂部一等兵は眠くなりそうだと思うと声をかけ、たばこに火をつけて口に入れてやったり、敵機の心配をしたり、神経が疲れること甚だしい。
　自動車隊出身の私は、夜行軍の運転手の眠い気持ちはよくわかるので、色々気を使ってやったので彼はたいへん喜んでいた。この運転手も後日撤退の途中、敵の砲弾で戦死するわけだが、本当に残念であった。　　（昭和 50 年 1 月 10 日記）
○　北大で同期だった全日本学生のスキージャンプ、ナンバーワンの亀ケ森君の宿舎（彼は北大理学部の地質を卒業して軍属として地質科に配属になっていたので、地質関係の軍属が泊まっていた宿舎と思う）に行って、夜ゆっくりダベったのも懐かしい思い出だが、彼は撤退途中ペグー山脈で戦病死して、今やこの世にいないのは残念である。
○　戦史に残る有名なインパール作戦における失敗から、昭和 19 年の秋頃退却してくる部隊がエナンジョンの我々の宿舎付近を通過する姿は見るに堪えない哀れなもので、負けては大変だとぞっとしたものだった。この敗走の兵隊の中に和歌山県出身のものが属する部隊があったようで、我々の中にいた吉岡少尉は和歌山県出身だったので偶然知っている兵隊がいたらしく、宿舎にいれて御馳走してやったら、涙を流して喜ばれたと後日聞いて本当に暗然とした。
　翌 20 年 4 月にエナンジョンから転進後、彼等と同じ姿に我々もなるのだが、その時は知るよしもなかった。
○　エナンジョンに移ってから日本の戦況不利なる事はひしひしと感じてきたのであるが、制空権は全く日本になくなり、空襲は度重なり、空襲の度毎に宿舎を飛び出し、防空壕に飛び込むわけだが、しまいには面倒臭くなってそのまま部屋に寝ていたりしたが、温厚な応召の年配江崎大尉から”上原よ、もっと命を大切にしろよ”と言われたが、今にして思えば、独り者の若気の至りだったなあと思う。
○　本部がエナンジョンに移ってから、本部、鉱業所の対抗テニスをやったりしたが、スコールの多い南方ということと、石油の生産地ということからかテニスコートはアスファルトで雨が止んだら直ぐ使えるようになっていたが、何だか足がひっかかるような気がした。私達少尉連中は軍属と仲良くスポーツを楽しんだのも懐かしい思い出だ。

◎　野口少尉の戦死
○　エナンジョン油田から車で数時間離れたところにシングー油田があるが、そのシングー油田に四国の新居浜高工出身の野口少尉（保定幹部候補生隊の歩兵出身）が勤務して

いたが、ある日、シングー油田だったか、あるいはシングーからエナンジョンに来る時だったか、敵機の銃撃をうけ野口少尉が腹部貫通銃創で倒れエナンジョン病院に入院した。この時、私は神田副官に呼ばれ、野口少尉の傷は致命傷で、ここ一両日の命らしいので、私が付き添って遺言を聞いてやってくれぬかとの事だった。彼と同じ原隊から誰も来ておらぬので、私は北京自動車隊だったが、一応保定幹部候補生隊に所属していたので、私が付き添うことになったのである。とにかく私はさっそくエナンジョン病院に出掛けていった。当時、病院は鉱業所の西方のイラワジ河に近い方向にあって、敵の爆撃が頻繁になってきていたので、重症患者は皆防空壕の中に寝かせてあり、かがんで入らねばならぬような防空壕だった。

その防空壕の中に入っていくと、多くの負傷兵と共に野口少尉も横になっていたが、既に正確な意識はなく、時々うなっているようだった。

とにかく壕の中は重症患者なので、痛いとか繃帯をかえて下さいとか、異様なうめき声が聞こえ、いささかぞっとする。彼が痛みを訴えるので、私が軍医将校のところへ頼みにいくと、軍医の診断では彼は盲管銃創なので恐らく数時間の命だろうとのことだったが、私（当時少尉）が頼みにいったので、特に注射してくれ、数少ないガーゼ、繃帯だったが新しいのと交換してくれた。

彼は一時小康を得たようなので、私は食事するため壕を抜け出し病院の事務室へ行き、食事をだされたが、負傷兵のあちこちのうなりとうめき声が耳についてさすがの私も全然食事がのどを通らず、箸をつける事ができなかった。

一昼夜つきそって折りにふれ、それとなく彼に遺言らしいものを言わせようと色々かまをかけたが、彼は唯々天皇陛下にすまないとだけ繰り返すのみで家族への伝言らしいものは何もしゃべらず、私に見まもられ夕方の６時か７時頃死んでいった。

私達は学生時代から天皇陛下の為なんて言って死ぬのがいるだろうかといささか懐疑的だったが、野口少尉が現実に私にいだかれてその言葉をしゃべったのは間違いのない事実だった。彼が死んだ以上はこんな病院の中に少しでも長くおいておくのは可哀想なので、すぐ鉱業所に電話して志水少尉（姫路時代から一緒で後にペグー山系で戦病死）に自分でトラックを運転して迎えに来てもらった。死体をトラックの上に乗せ、月のこうこうと照る中を鉱業所の事務所へとトラックは走ったが、死体がゆれるのが可哀想で、わたしは彼の死体を膝の上にかかえ、鉱業所につくまで敵機の来襲のないことを祈りながら”都ぞ弥生”を口ずさみつつ、何だか胸にじんと来るものがあった。

鉱業所の事務室で通夜をとり行い、翌日葬儀をし、ダビにふすため我々少尉連中が鉱業所の敷地内の谷で薪を積み上げ、火葬にしたが、敵機の来襲が時々あるので、その度に防空壕に逃げ込み、制空権をとられている情けなさをつくづく感じた。

（昭和 50 年５月８日記）

○　エナンジョンでも大日方と一緒に暮らしたと思うが、彼はある日外出先から帰ってきた、”マスター、今日はえらい目にあったよ”という。一体どうしたのだと聞いたら、途中の道路で女の子に声をかけられ、メガネ蛇（コブラ）を見ないかというので鼻の下を長くして立っていたら、バスケットからメガネ蛇を出して”ジャラン、ジャラン”と叫び、芸をさせるので喜んで見ていて、そのまま帰ろうとしたら”マスター、お金”というので何だと思ったが仕方なく軍票を支払ったとのことで、”馬鹿野郎、鼻の下を長くするからだよ、ただで見ようなんてさもしい気をおこすからだよ”とひやかしたものだった。

（昭和 50 年７月８日記）

昭和 18 年 2 月 10 日　幹部合格発表の日　幹部候補生を命じ、一等兵の階級を与う。
昭和 18 年 4 月 １日　甲種幹部候補生を命ぜられ、上等兵の階級を与えられる。
昭和 18 年 4 月 ８日　植田中隊長等野戦部隊として出発。
（ビルマに行った兵(ﾂﾜﾓﾉ)兵団なり）
昭和 18 年 4 月 29 日　一泊二日の外出許可で神戸に帰る。
昭和 18 年 5 月　3 日　２０時、姫路港出発。北京へ向かう。
昭和 18 年 5 月　4 日　下関に 11 時半着、関釜連絡船 14 時 40 分出発。
昭和 18 年５月　5 日　12 時釜山着。
14 時釜山出発。
昭和 18 年５月　6 日　5 時頃京城着。リンゴの樹が目につく。
昭和 18 年５月　7 日　宮原（満州）で哲男兄、姉に会う。
昭和 18 年５月　9 日　11 時北京着。
昭和 18 年５月 10 日　北支那自動車教育隊の隊長は今坂隊長、区隊長は宮本中尉、助教は首藤軍曹。
昭和 18 年６月 2 日　伍長になる。
昭和 18 年６月 20 日　神戸一中時代の友人森軍医少尉来営。
昭和 18 年６月 25 日　保定幹部候補生輜重兵隊となる。
昭和 19 年１月 16 日　宇品港出発。
昭和 19 年２月 15 日　昭南（シンガポール）上陸。
昭和 19 年３月 12 日　ラングーン到着。
昭和 19 年７月　1 日　任陸軍少尉。
昭和 20 年４月 20 日　無念エナンジョンより転進開始。
昭和 20 年８月 21 日　モールメン到着。
昭和 20 年９月 26 日　ナコンナヨーク終結地着。
昭和 20 年５月 31 日　私物検査。
昭和 21 年６月　7 日　バンコック発、内地へ。
昭和 21 年６月 15 日　浦賀着。
昭和 21 年６月 20 日　揚陸開始。
昭和 21 年６月 22 日　復員完了。夜、神戸へ向け出発。
昭和 21 年６月 23 日　神戸着。無残な焼跡。
昭和 21 年６月 24 日　三田へ。

◎　エナンジョン撤退開始
〇昭和 20 年４月 20 日はビルマ燃料工廠としてエナンジョン油田からいよいよ撤退を開始した日である。この頃になると、シングー油田にすでにグルカ兵が攻めてきたという情報もあり、ビルマ燃料工廠の本部としては、もし撤退するならば油田をどのように破壊するか綿密な計画を立案して鉱業所に指示したようで、これについては私はあまり詳しくは知らない。
　石油専門学校の水野中尉が４月 18 日頃？戦況報告に部隊長のところにかけこんできて、

グルカ兵と一騎打ちして刺し殺した話や、また敵の攻撃方法は日本軍と異なり、一日１km 前進したとすれば、安全のために必ずその 3 分の１は逆戻りしてそこに陣地をしいて、また翌日に１ km 前進し、また 3 分の１さがり、陣地をしく方法で攻めてくるということも聞いた。とにかく異常な事態になってきたことは確実で、19 日には我々の事務所、宿舎の書類、及び敵に利せられるものはすべて焼き、いつでも撤退できるようにし、悲壮な気持ちで 19 日の夜は大日方と二人で宿舎の外にふとんを持ち出し、天を仰いで寝転んでいた。（この書類焼却の時に、英国の作成した英字のビルマ全土の詳細な大きな地図があったので、一部は神田副官に渡し、後は燃やすべきだったのだが、私がこっそり一部を地図入れにいれ、机の引き出しにあったシンガポール（昭南）の酒保で買った磁石を一緒にいれて私がまさかの場合には役立つだろうと自分で携行することにしたのだが、これで後日助かる訳で、運命というものは確かに数奇なものである。）

大日方が”上原、お前はきっと斥候にだされるぞ”と話しかけてきたが、私はビルマ燃料工廠で今、斥候に出されるのは俺しかない筈だの自負もあったので、勿論そうだろうなあ、と答えた。

そのうち、８時か９時か忘れたが、部隊長の当番が”上原少尉殿、部隊長がお呼びです”と呼びにきたので、二人はそれ来たと顔を見合わせ、私はすぐ側の小さな谷の向かい側にあった部隊長宿舎にとんでいった。

部隊長及び神田副官がそこにおられたが、部隊長から斥候に行ってほしいとの命令だった。

その目的は、ビルマ燃料工廠として英軍（主にグルカ兵で、指揮官は英国人）の攻撃を持ちこたえることができぬので、ラングーン方向へ撤退の方針だが、エナンジョンを街道沿いにラングーンへさがれるかどうかを調べてほしいとの事、もし駄目ならばイラワジ河を渡河して対岸の道路を南に下がらねばならぬ。マンダレー方向よりの敵はシングー油田からエナンジョンへ攻めてきておるが、別にエナンジョンの油田の南にある街道沿いのマグエ飛行場付近で街道を遮断したとの情報もあり、これを確かめるのが目的である。

好人物の部隊長の老大佐は”上原、決して死ぬんじゃないよ。無理をするんでないよ”と私に言われたが、私も、いや絶対死なずに私の使命を果たしますと返答した。

とにかく、小型トラック１台（ジープ？）を出すから君の好きな兵隊をつれていってよいというので、作井中隊の下士官と兵を５～６名出してもらえばよいといって、さっそく出発することにす。

○　その夜は月のない星空の夜だったと記憶しているが、小型トラックの後の荷台に幌がかかっており、私は助手席に乗り、運転手以外の兵隊は荷台に乗せて、部隊長宿舎前を出発、南へと車を走らせる。北京での北支那自動車教育隊での自動車隊将校となる教育がここで生かされるのだと緊張する。

途中、南からエナンジョンへ向かってくる日本軍の自動車２～３台に会い、これを止めてて様子を聞いたところ、病院の自動車でラングーンへ向け強行突破しようとしたが、どうも無理なので皆引き返してきたとの事。

マグエ方向を見ると、夜空を曳光弾が飛び交い、日本軍と英軍が盛んに撃ち合っているようで、とにかくもう少し前進しようと車を進め、結局エナンジョンから１時間位走ったと思うが、どうも怪しいので車をとめて運転手に車を反転させ、エナンジョン方向に車を向け、いつでもエナンジョンに引き返せるようにして全員下車し、様子をさぐることにす。

そのあたりの道路の両側には民家はなく、野原の感じのするところだが、とにかく真っ

暗闇で、その野原に入ってじっとうかがっていると、マグエ飛行場辺では依然として砲弾の撃ち合いがあり、またラングーンに向って右側の野原を少しずつ入っていくと、どうも敵らしい人声と匂いが感ぜられ、これ以上進んで調べてみても、軍属主体のビルマ燃料工廠の400名が自動車で強行突破してラングーンに下がるのは無理と判断し、速やかに引き返そうと兵隊を車に乗せ、大急ぎでエンジンをかけ、エナンジョンに向けスタートさせ、200メートル位行った時、車のとめてあったあたりにドカンと擲弾筒らしいのを撃ちこまれた。危機一髪で命が助かったわけだが、自分の運のよさに感謝するとともに、自分の勘の良さに今後の戦いの自信をもつ。兵隊たちも命が助かったと大喜びで車をぶっ飛ばし、部隊長宿舎に帰り、部隊長に自動車でのラングーンへの強行突破は無理であるとの報告をしたので、部隊としては４月20日の夕方、イラワジ河を渡河してエナンジョンを脱出し、対岸を南へ撤退する方法をとるべくあらゆる手配をすることになる。

この大撤退作戦のまず最初の斥候だったが、これですっかり度胸がついた感あり。

○　４月20日夜を期していよいよエナンジョンを撤退することとなり、イラワジ河の渡河の要領、船の利用の仕方、渡河点呼等、いろいろ打ち合わせをする。

この20日の昼間に、部隊長宿舎や事務所で使っていたビルマ人の女達が日本軍必ず又来て、英国軍をやっつけることができるから悲しむんでないと我々日本人を激励するとともに、別れを惜しみ、皆涙をながすので、我々日本軍の将校として、ビルマ人の日本人に対する情にはほろりとさせられ、永久に忘れ得ないものがある。

ビルマ燃料工廠で使っていたビルマ人達は今どうしているかと、ふと懐かしく思い出される。

昼間に油井及び製油所の破壊作業を行ったが、これは製油所の人達の作業となり、そのとき棚橋少尉がひどい火傷を全身におい、担架に乗せられ真っ白な繃帯にまかれ目と鼻だけ出している姿を見て、びっくりすると共に何とか回復してくれと祈るのみだった。

○　いよいよ夕方近くなってそれぞれ定められた渡河点の方へ転進を開始。

ちょうどその頃、鉱業所のトラック一台に兵、軍属を乗せて車少尉（大阪外語、印度語卒、岩井産業勤務）がトラックの上で手を振りながら南下したのが目についたが、結局彼の消息は杳として分からず。どうしたのだろうか。

復員してから、車君の実家の方が私に会いに来られて、消息を尋ねられたが、その真相をしゃべる事もできず、本当にご家族の方には申し訳なかったが、これも致し方ないと自分に言いきかせた。

われわれはエナンジョンの左岸へ徒歩で前進し、用意された多くの小舟にそれぞれ分かれて乗り、対岸に漕ぎ出した。対岸での集結地点を予め決めていたが、対岸についてはみたが燃料廠の部隊が分からず、色々さがしたが結局まわりを見れば燃料廠の経理の石原少佐と私と自動車修理の古田一等兵数名と※※准尉、※※軍曹以下約20名位の作井中隊の連中のみで、とにかく今夜はここで頑張ることにしたが、対岸のエナンジョン油田は我々のしかけた爆破のため、ドラム缶が空中高くドカンドカンと舞い上がり、ああ、これぞ”ローマ落つるの日か”の感を深くす。

とにかく色々の部隊が、油田側から渡河して来ており、テンヤワンヤの状況だったが、我々27~28名の一行は、どこかで休憩すべく民家をさがしていたら、どこからともなく立派なシェパードが私のそばによって来て、一緒に歩き、民家のアンペラ上に休憩のために横たわると、私のそばに来て、横たわるのであまり犬好きでない私でも可愛くなり頭をなでてやると一緒に眠る。しばらくして我々が南の方に移動を始めたらこのシェパードは

私にくっついて歩き、夜のビルマの小さな部落を通り抜けるときはビルマの犬に吠えられるのをこのシェパードがビルマ犬を制してくれて本当に助かった。
　考えてみるとこの犬は憲兵隊の将校が訓練して連れていたのでつい迷ってついてきた様に思えた。１～２日、夜行軍した時、ある部落で色々の隊と錯綜したことがあったが、その時シェパードが見えなくなってしまったが、恐らく元のご主人にあったか、または似た将校にあったかどちらかであろう。ほんの僅かの間だったが、シエパードがいなくなると何となく淋しくなった。
　こうして渡河後本体と離れて 27~28 名で別行動をとることになってしまった。私が兵科の将校として指揮する事になったが、前述した通り、英語の地図とその同じ地図入れに入れてあった磁石（シンガポールの酒保で偶然買ったもの）が夜光であったことに驚くと共に、この磁石があったために、今後の夜行軍に大いに助かった次第で、若し昭南（シンガポール）で志水君に誘われた時に、この磁石を買っていなければこの先どうなったかわからなかったと思うと、人間の運命などはどこでどう転ぶかわからないとつくづく感じた次第である。　（昭和 50 年 7 月 8 日記）

◎　電気中隊、洲崎九二夫氏（当時兵長）の撤退経路
　エナンジョン→ピンビュー→ミンビヤ→エマナ→タイトンミョー→パト→カマ→パトン→トンボ→ミヤナウン→カナウン→イエジ→バライワ→エナンボン→セイワ→タンビゴン（ここよりペグー山系）→オンゴン→メザリ→香取→１４１１高地→クン河→軍用道路横断→ミヤンビサン→キョー→キョーサン→クンゴン→シッタン渡河→キャウキ→シュエジン→加古川→祇園→チャイトー→ビリン→モールメン→

◎　本隊とはぐれての撤退行（約１ヵ月？）
○　かくて本隊とはぐれてのこの 20 数名の撤退行はすべてその責任は私の肩にあり、石原主計少佐は我利我利の情けない将校で、例の猫なで声でさかんに私をおだてるのでおかしいやら気の毒やら。撤退するというのに、きれいな長靴をはいて、これで戦争になるものかと腹の中でおかしかったが、とにかく、20 数名の者全員を無事にラングーンに撤退させるのが私の今の任務と自分で考え、地図と磁石をたよりに南下を開始す。道路は昼間は敵の偵察機がくるので、できる限り行動を慎み、ビルマ人の部落で休息をとり食事と寝をとることとし、夜にもっぱら行軍す。
　この撤退行は約 1 ヵ月というものの、残念ながらその時利用した地図は今はなく、どの部落を通過して行ったかは皆目不明だが、イラワジ河右岸を南へ南へと下っていったことだけは確かで、本隊に会うまでの事件を断片的に記していく。
○　まず南下の方針としてできる限りビルマ軍票と携行していた木綿布地をビルマ人に与え、鶏とか米とかの食糧と交換してもらい、絶対略奪でなく買いとることにし、日本軍人として紳士的態度をとることを全員に徹底させる。（もっとも我々は後方補給部隊だったからこいう行動をとることが出来たのかもしれないが）。まず部落に入ると、村長さんを呼ぶか、一番大きそうな家を尋ねてその交渉をし、どこかの家の座敷の階下（だいたいビルマの田舎の家は皆、丸太で階上が座敷で、階下は素通しになって土のままになっているのが多かった）で休憩させてもらうことにした。
　だいたい部落に入ると女はすべて雲がくれさすのか姿を見せないようであったが、私達

の部隊は絶対女子供にいたずらさせないから、女子供を隠す必要がないことを説明するが、ビルマ人としてはやっぱり警戒するのが当然だと後日思った。
○　数日撤退したある昼間、野原の中の一軒家で農作業の用具小屋らしいところに休んでいた時、敵の偵察機が低空で飛んできた。手投弾を手にもって下界をのぞき込む敵のパイロットの姿を見た時は、これは”もういけない、大変だわい”と瞬間思ったが、我々の隠れているのに気がつかず飛び去ってくれたのにはほっとしたが、この時も石原主計少佐の臆病な態度には、若者として何ともはや嫌気がさしたと同時に、情けなくなった。
○　毎夜の行軍には自動車修理工場の古田一等兵がいつも私のそばにいて、彼がビルマ語でビルマ人に道をきいてくれるので、大いに役立った。彼は燃料廠の修理工場で働いていたのでビルマ人を直接使っていたので、我々将校と違い、ビルマ語の日常会話は何とか片言でしゃべれるので便利でよかった。この古田一等兵はなかなか気っ風のいい男で、ペグー山脈まで一緒で私の世話をしてくれたのだが、ついに山中で自決したのは残念で申し訳ないと思うが、彼のことは後で記す。
○　部落に入る度に、鶏を料理し、土鍋でスープをつくり白米をたき、これが実においしかったが、この頃ビルマ兵が反乱し、部落によっては日本軍に利用させないように、部落を焼き払って逃げているところがあり、これには弱ったが、そういう所は危険なので、焼け残りの玄米等をさがして、もしあれば無断借用してそのまま南下していった。
○　毎日毎日同じ生活で南へ南へさがるので、兵隊達はだんだん疲労を覚えてきていたが、敵襲もなかったので安心したのか、何とか不要の荷物を棄てたいと思うのが人情で、38 式の小銃の弾薬を最小限残して後は林の中を歩いている間に横道に入って弾薬を棄てていたようであった。勿論そんなことは将校の私が知るはずもなかった。
　ところがある日、途中で猛烈なスコールに会い、ビショ濡れになったので、道路端にあった無人の一軒家に入り込み、裸になって焚火をして衣類を乾かしていたところ、目の前の水溜まりに手榴弾が飛び込んできて炸裂したので、兵隊達は散を乱して逃げ出した。私は慌てるなと叫ぶとともに洋服を着、靴をはき、軍装をととのえてから最後に駆け出したが、私のその時の胸の内は、日本軍の将校たるもの、ふんどし一つで殺されてたまるかの自覚があり、それでこういう態度をとったのであるが、准尉、下士官以下余りに慌てて狼狽し、逃げ出したのには情けなかった。とにかく全員集結させたところ、負傷者もなく、安心したものの、飯盒を棄ててきたもの、水筒を忘れたもの、銃剣を忘れてきたものもあり、ここではじめて准尉、軍曹以下兵隊をどなりつけた。軍曹達はもう敵がいないだろうから忘れ物を取りに行くと出掛けたが、そこにはもう何も残っていなかった。
　そこで急いで、昼間だったが、林の中なので歩きだしたが、兵隊が道路の右に左に入っては出てくるので何をしているのかと思ったら、軍曹の説明では重い弾丸を大分棄ててきたのだが、敵襲で恐ろしくなって、自分達の棄てた経験から、先にこの道を通過したであろう日本兵が弾丸を大体棄てたであろう所が推測されるので、それらの弾丸を慌てて拾い集めているとのこと。人間なんて勝手なものだと腹の中でおかしくなった。
○　ある割合大きな部落に着いた時、村長らしい人達に豚と米を分けくれと交渉したが、古田一等兵の通訳ではこの部落には豚は二頭しかいないのでかんべんしてほしい、鶏でがまんしてくれぬかとのことなので、それなら鶏で結構だということで話がついた。
　二、三カ所の家に別れ寝転んでいると、ある歩兵部隊（戦闘部隊）が私達の後からこの部落に入ってきたのを見ていると、だまって水がめの水をとったりするので、日本軍として略奪するのはけしからぬと、私は将校として彼等の理不尽な態度を一喝し、私の見える

範囲ではやめさせたが、戦闘部隊はさすがにすさんでいるなあと悲しくなった。
　しばらくすると、先程の村長さんが飛んで来て、大声で何やらわめくので、どうしたのだと古田一等兵に聞くと、今入ってきた日本兵達が豚を殺しに来た、貴方達には断ったが、彼等にそんなことをされるくらいなら、貴方達に食べてもらいたいから鉄砲をもってこいと呼びに来たという。それなら長い間豚等たべてないから、志をもらえと古田一等兵等を行かせて久しぶりに豚肉にありついたわけだが、このビルマ人の心情は同じ人間としてよく分かる気がすると同時に、同じ日本人として現地人にこんな思いをさせた戦闘部隊に憤りを感じた。
○　夜行軍では私が先頭で皆を引っぱつて歩くのだが、私が余りに健脚すぎて兵隊がついて行けませんと下士官から言われた。夜道を１時間ほど歩いては道路端で小休止 5~10 分するが、私は寝転んで天を仰いで星を眺め、眠るわけにも行かずにいるのに、兵隊達はすぐ眠りこけ、5~10 分たった頃、全員を起こしまた歩きだす繰り返しで、くっつぃて来る連中は気が楽だなあと思うとともに、もさもさしていると後から敵が来て殺されるぞとおどしたりしたものだった。
○　２週間も歩いた頃だったか、夜行軍の途中、前方に弾丸の打ち合いがあるのが見られ、全員をつれて歩くのは危険と感じたので、准尉に斥候に出るように命じたところ、彼は”少尉殿、とても前へ進むのは危ないからよした方がよい”と言い、恐ろしがって話にならぬので、”よし、俺が行くからお前は兵とここに残れ”というと軍曹がとんできて”少尉殿、私が一緒に参ります”というので、よしそれなら着いてこい、と前方をさぐりに行ったが、その途中軍曹が言うには、あの准尉は北支でも臆病で駄目だったですよとしゃべってくれた。だいたい前方の様子をさぐったが、なんとか大丈夫そうなのでこの場所に戻り、さあ出発だと命令するとその准尉は上原少尉殿、それは危険ですと怖がるから、馬鹿野郎、ここに残っていても敵が追撃してくればやられるのだから、嫌なら貴様一人ここに残っておれと前進を開始したら仕方なくついてきた。何と情けない奴だと馬鹿くさくなった。
○　それから数日たつと、とにかくイラワジ河を再渡河し左岸をラングーンへ向かって下がらねばと考え、河の方向に進んで木陰から河の方を見たところ、グルカ兵らしいのが対岸におり、これは駄目だわいと街道の方へ引き返し、もう少し、右岸をさらに南に下ることにする。
　この時、対岸にグルカ兵を見た時は、この 20 数名をどういうふうに無事にラングーンへ下らせ得るか、いささか内心困ったわいと思った。（この時はラングーンまで下れば日本軍がいて、大丈夫と思っていたのだが、実際はラングーンもダメだったことは後日知った。）

（昭和 50 年 9 月 23 日記）

○　昼間は敵機の来襲をおそれ、民家の下で大休止し、夜になって行軍を始める毎日の連続だった。定めた進路を間違わないようにするのに神経を使ったわけだが、道路が二股になり、しかも英語の地図にそんな所が記載されてない時にはどちらに行くべきか迷うわけだった。とにかく地図と磁石で勘を働かして進路をきめて進んだが、全然方角をたがわず思った方向に進むことができたのは幸いだった。兵隊達には少尉殿すごい勘ですねと感心されたが、昭南（シンガポール）で可愛い姑娘から志水少尉と一緒に買った磁石（偶然夜光だった）と地図の英語が読めたという幸運に感謝す。

◎　本隊にめぐり合ってからペグー山脈へ
○　それから数日して偶然、鳥居大佐の率いる燃料廠の本隊に出会う。復員後、大薮少尉から聞いたのであるが、この時私達 20 数名がやって来たのはよく覚えていてくれており、私の記憶では鳥居大佐は非常に喜んでくれたが、神田副官には大目玉を食ったように思う。腹の中ではこの野郎と思ったことが未だに頭の中にある。何はともあれ、本隊に会ったのは神の助けであり、そうでなければイラワジ河の渡河はおそらく難しかったろう。
　とにかく、棚橋、大日方等同期の少尉連中がみな喜んでくれた。ちょうど本隊は船を準備し、イラワジ河を渡河する直前だったので我々は本当に助かった。
　そして渡河してからが私の独壇場だった。（一寸おおげさだが）。というのは、大体燃料廠は補給廠なので兵科の将校は少なく、ことに私のように体力がある若手将校は余りおらず、応召の家族持ちの将校が多いので、この際、私が若いのだから私に任せなさいと毎日毎日昼間には斥候に出て夕方引き返しては部隊の尖兵となり先頭にたって夜行軍を行う。昼間の斥候の服装は、上はシャツ姿で下は現地ビルマ人のロンジー姿で草履（サンダル）をつっかけ、ズタ袋にピストルと手榴弾をほうり込み、１～２名の兵隊を（同じ姿で）つれて一緒に歩き、部隊進路の部落の安全性をたしかめ、夕方 4 時半～5 時頃には既に出発準備の完了している本隊へ帰り、慌てて飯をかきこみ、直ちに服装をととのえ、尖兵となり部隊の先頭を歩くという毎日で、本当によく頑張れたものと我ながら感心する。こうして現地ビルマ人と同じ格好で歩いていると敵の偵察機が飛んできても、全然敵は日本兵と気づかず、悠々と道路上を歩けるという利点があった。
○　ある日、ある部隊で斥候にも出ず、昼間、部隊の現地人の家のアンペラの上で疲れてぐっすり寝ていた時、”起きろ、起きろ”と私の体の上に馬乗りになって私をどなりつけ殴る奴がいるので、”この野郎、うるさい”とどなったところ、それは鳥居大佐（部隊長）で、”上原、敵襲だから逃げろ、貴様、早くしないと死ぬぞ、殺されるぞ”と私をたたき起こしていたのであって、なるほど機関銃、小銃の音が耳に入ってきて、慌ててその民家から逃げ出したことがあったが、そこまで眠っておられるほど疲れていたのは愉快といえば愉快だった。
○　ペグー山脈に逃げ込むまでの間、飛行機の爆撃、銃撃にあったが、それよりも恐ろしいのは敵の大砲だった。敵の偵察機が飛んできたと思うと、しばらくするとその通報により、敵の大砲の洗礼を浴びることになるが、大砲の場合は、一発目が前方へ落ちると二発目は手前へ落ち、だんだん着弾点が修正され、砲弾が段々と自分に近づいてくるので本当に身の縮む思いがした。飛行機の場合はババババ-------と撃たれても（あるいは爆弾を落とされても）その時間は一瞬の間で、すぐ飛行機は一応はるか彼方に飛び去るので、その恐ろしさはその時間だけだが、大砲の場合には、じわじわと着弾点が近づくので本当に恐ろしいと思った、そして、大砲の弾丸はヒューヒューと頭の上をかすめてドカンと炸裂するので本当に恐ろしく、今日はもう駄目だと思ったことが何回となくあった。
　ある部落で休んでいた時に、大砲の洗礼を浴びだしたので、慌てて防空壕のような所に飛び込んだら、中島大尉や赤尾？軍曹がいたので、ああ今日はもういよいよ駄目らしいよと私が軍曹に語りかけても軍曹は何も返事しないのでおかしいと思ってよく見ると、”波阿弥陀仏------”とふるえながら口ずさんでおり、こちらの言葉に返事もできないので、私は中島大尉としゃべっていた。この軍曹は撤退前までは兵隊にいばり散らしていた下士官なのに、かくも臆病者かと思うと、何だかおかしいやら馬鹿くさいやら、私もこんなみじめな男に生まれなくてよかったと思うと共に、何だか腹立たしくなった。

それにひきかえ、たしかこの時の砲撃で坂部一等兵（鳥居大佐の当番兵）が部隊長と共に壕に入ったが、部隊長の軍刀を忘れたとかで、それを取りに飛び出し、軍刀をもって壕に再びかけこんだが、瞬間、お尻が壕より上部にあったため、砲弾の破片で即死した。（重傷で1～2日後に死んだ）。あのおとなしい兵隊の責任感と勇敢なる死が私の心を痛めた。今もおとなしい真面目であった彼の顔と姿が思い出され、何かしら目頭が熱くなるのを禁じえない。ことに彼とラングーンからエナンジョンへ部隊長の車で、二日間夜のみ走ったのが憶い起される。（昭和50年12月5日記）

○　ある部落での出来事だったが、どうも敵の部隊が近い所にいるようなので、鉱業所所属の高橋少尉が長となり、数名の兵を連れて斥候に出たが、その後敵襲があり、部落の出口で機関銃を構えて応戦した。この時の高橋少尉以下の斥候はついに帰還せず、結局敵にやられたらしく、棚橋少尉が躍起になって探したが結局駄目。高橋少尉は小柄で眼鏡をかけ、実に人のよい男で、その彼がいち早く死んでしまうとは何ともいえぬ残念な気持ちになった。

○　とにかく、イラワジ河を渡河し、次にラングーン街道を横断し、ペグー山系に逃げ込むことになる。（昭和50年12月23日記）

○　平坦地の行軍はもちろん夜のみだが、夜の田圃の畦道のみ歩くと進むべき方角が怪しくなるので、進行方向を地図で決めると、星で方向を決めて畦道であろうが田圃であろうが膝まで水につかろうが、ただ真っすぐに先頭を歩き兵隊を後からついて来させたが、よくぞまあこんな行軍ができたものだと我ながら感心する。

とにかく、方向を間違えば大変になるからということで、これより別の方法は考えられなかった。大胆といえば大胆、無鉄砲といえば無鉄砲だった。

○　こんな事をしながら行軍を続け、5月20日過ぎか（日は確かではないが）、ペグー山脈の麓（入口）にたどりつき、いよいよ山中を歩くのだが、山に入ると竹がものすごく多く、平坦地と異なりジャングルなので、飛行機に見つかる心配がないので、昼間行軍ができるということが取り柄だった。ところで人跡未踏のペグー山系なので、道路といっても象の通り道らしく、ところどころにその道のそばに竹を弓なりに両方から曲げて象の休憩所を作ってあるのには驚くと共に上手に作ってあるものだと感心する。

ある日、私達より半日か一日遅れて行軍している部隊の連中が不幸にも象に遭い、一人は胸の上に乗られ即死したらしい。また雑嚢の中の飯盒を踏みつけられた後は飯盒は一枚の板になっていたと聞き、本当にびっくりさせられた。我々は運がよかったなあ、と皆で胸をなでおろした。

なお、山に入ると毎日毎日竹を切り、竹で骨組みをつくり、葉っぱで屋根を葺き、家を建てていくのだが、田舎出身の兵隊はこういうことは実に上手で、本当に上手にやってくれるので大助かりだった。昼間歩いては夕方から家を建て、翌朝起きてまた歩くのだから大変な事だった。

◎　香取村滞在（待機？）約1ヵ月

○　とにかく、5月中旬か下旬か忘れたが、ペグー山脈の一カ所に時が来るまでとどまることとなったが、確かこれを香取村と命名されたと思う。ここでは方面軍の指揮下で撤退のための待機の姿勢にあったと思う。この間に色々の事が起るわけだが、記憶のままに断

片的につづる。
○　携行してきた食糧が減るので、時たま軍が山系の麓の方の敵に夜襲をかけに行くので、我々燃料廠の者はそれを運搬する手伝いに出掛け、戦利品を貰って大喜びしたこともあった。
○　このジャングルでの生活では、僅かしかない米は大切にせねばならぬので、無尽蔵と思える程の竹の子をきざんだ中に米を入れるようにし、飯をたいたような状況で、勿論おかず等はなく、少しずつもっていた塩を湯にとかし、スプーンでなめながら、その竹の子ご飯をたべるわけだ。塩を直接なめる事ができるほど持っていないので、こんな哀れな食べ方をするわけだが、かたつむりを見つけようものなら、宝物を見つけたように欣喜雀躍して塩汁に抛りこんで食べたものである。
○　この待機中にもっとも嫌な事件が起こって、日本人としては本当に情けなかったが、ここに記す。
　実は燃料廠としては石油の採掘、精製の技術を現地のビルマ人に教え、中堅技術者に育てようと石油学校を開設していた。教育は作井中隊の水野中尉が校長となり我々の同期の堀井？少佐も教官となっていた。日本でいえば、当時の工業学校のようなもので、ビルマ人の小学校卒業程度の子供に、たしか２～３年位、日本語、石油の採油・精製技術、軍事教練等を教えていたと思う。非常に賢いビルマの少年達で、いつだったか、水野中尉に彼等の試験答案を見せられたが、国語（日本の）等は未然、連用、連体等の国文法まで習い、しかも 100 点近い点数がとれるのがおり、我々日本人よりできるのではないかと恐れいった記憶がある。
　また、卒業式には松田部隊長の訓示を首席のビルマの少年がすぐビルマ語に通訳する等、堂々たるもので、我々日本人としては恥ずかしい位だと水野中尉が語っていた。また、彼等は堀井少佐等によくなつき、そのうちの４～５名が我々部隊の撤退についてきて、どうしても東京まで日本兵と一緒に行くと言い、撤退の途中は彼等は敏捷でしかもビルマ語と日本語ができるので本当に助かったと堀井少尉等から山の中で聞いた。
　ところがある日この少年たちの上に非常に不幸なことが起こったのである。その頃、私は鳥居大佐、山下少佐のそばにいて、本部付き将校として命令書きをやっていたのであるが、鉱業所所属の棚橋少尉等がやって来て、本部はけしからぬことをすると血相をかえて言うので、そのわけを聞くと、司令部の方からの命令で、部隊と行を共にしているビルマ人を殺せということになったから、我々についてくる石油学校のビルマ人の少年達を殺すようにとの命令が山下少佐から出ているということだった。
　そんなことは全然知らなかったから、血の気の多かった私はそんな馬鹿なことがあるものかと山下少佐に聞きにいくと、少佐はその通りだと言うので、私は山下少佐に命令を書いている私を素通りさせて鉱業所の将校に直接命令する理由がわからぬし、大体こんな馬鹿なことはすべきでない。彼等ビルマの少年は実に立派で信用するに足ると力説したが、最後には”上原、貴様等は上官の命令を聞かぬのか”と一喝され、私は腹の中が煮えくりかえったが、帝国陸軍の少佐と少尉では如何ともしがたく、引き下がらざるを得なかった。（この事件が、後日、山下少佐に対する私達の態度が、山下少佐の運命を決めることになったが-------）。
　残念ながら私達ではこの命令を変更することができないと棚橋少尉等に謝るより仕方がなかった。結局、棚橋少尉等がペグー山系のこの山中で谷の方へ少年達を連れていき、少年達にこの話をし、涙をのんで死んでくれるように言い、少年達も納得し、たとえ私達は

こんなことになっても日本の貴方方は大好きだと言って従溶として死についたとのことで、その時目隠しをしようとしたら目隠しはいりませんと堂々と死んでいったと聞き、その時もそうだったが、今でも当時の帝国陸軍のこのやり方は情けない。今ここにこれを記しつつ涙の出るのを禁じえない。可愛かったビルマの少年達の冥福を祈るのみ。この少年達のことを思うにつけ、現在の我々日本人の大人（指導者）の情けなさをつくづく思う。皆すべて若い時代があったはずで、若き日のことを忘れず正しく生きてもらいたいと思う。

（昭和 51 年 8 月 28 日記）

○　香取村に待機中は軍参謀の方から命令が来るわけだが、この間は何するともなく、竹の子飯を炊くのと、衣類についたシラミとりが仕事のようになっていたが、私はちょうどこの頃、マラリヤにかかり、高熱を発し、キニーネを飲んで回復をはかったが、なかなか思うように治らず弱ったが、それでもアミーバ赤痢を併発せずに助かった。マラリヤとアミーバ赤痢を併発した連中は完全に死んでいった。

○　この山中の長い待機は、我々が平野に出ても戦車等が動きのとり難い雨季になれば敵にやられる心配は少ないことから、雨季で平地が泥濘になるのを待ったためで、7 月 1 日頃、いよいよ香取村を出発。平野に近いペグー山系の出口の所まで進むことになった。

（昭和 51 年 10 月 22 日記）

◎　香取村 7 月 1 日出発、ペグー山系出口まで（7 月 20 日過ぎ）

○　軍参謀の方からの命令でいよいよ 7 月 1 日頃、香取村を出発することになったが、私はマラリヤのため未だ体調が完全ならず、部隊の最後尾を杖をつきつつやっと 2~3 日ついて歩き、ジャングルの中の道をトボトボ歩き、道路上のかたつむりを見つけると、目の色を変えてとり、休憩地点での食事の塩汁に入れ、舌つづみを打つ。とにかく、古田一等兵やその他の２、３の人が一緒について歩いてくれて、やっとの思いで、部隊の最後尾を歩いていたが、段々体が回復し、2~3 日後には先頭の部隊長の傍らで各隊に命令を伝達する位になり、ほっとする。

昼間も暗いうっそうとしたジャングルの中をひたすら平地に出るべく歩き、夕方になると竹で、ニッパ椰子の葉で住家をつくり、翌朝また行進する。（我々都会育ちの者は下手だが、この住家づくりには田舎育ち、農家出の人達は実に上手で感心させられた。）

とにかくうっそうとしたジャングルなので、飛行機の来襲もなく、夜、炊飯ができたのは幸いだった。もっとも竹の子飯だけで、飯よりも竹の子の方が量が多いのだが、これに塩汁のみであった。

○　この出発後数日にして、残念なことに姫路の中部五十四部隊の初年兵時代から一緒だった志水少尉の死んでしまったことである。（7 月 7 日）

彼はこの香取村出発まではものすごく元気で活躍してくれ、私等は最後にマラリヤにかかり本当に面目ないと思っていたが、彼は逆にこの出発後マラリヤとアミーバ赤痢にかかったらしく、途中でだんだん弱り、ついに動けなくなったらしい。出発して何日目かは覚えていないが、私が先頭に立って行軍をしていて、その日の休息地点で部隊の最後に到着した者を確認したところ、志水少尉の姿がなく、志水少尉達と一緒にいたはずの下士官に棚橋少尉等と一緒に詰問したところ、彼は”俺のことは放っておけ、一人で後から行く”と言い、下士官たちは何とか一緒につれてこようとしたが、ついに志水少尉は”命令だ、貴

様等は上官の俺に反抗するのか”と言い、軍刀をふりかざすので、涙をのんで先に来たと言ったので、下士官等を猛烈に叱りつけもう一度探しに行かせたが、結局無駄だった。おそらく、谷間におりていって自爆したのであろう。

姫路以来、常に一緒で、北京の北支那自動車教育隊で共に自動車隊の訓練をうけ、南方燃料廠へも私と一緒だと喜んでくれ、シンガポール（昭南）で３週間一緒に燃料廠本部の教育をうけると共に、毎日飲み、遊び、酒保で美少女の姑娘（クーニャン）から嬉しそうに何か文房具を買った彼。ビルマに配属が決定し、私と一緒に行けると喜んだ彼。しかし、ラングーンに着いてから私が本部勤務、彼がエナジョンの鉱業社勤務になり、悲しそうな顔をした彼。しかし戦局我に不利になりラングーンの本部もエナジョンに転出し、また一緒になった時の喜んだ彼。そうしてその後、敵機の来襲で戦死した野口君の死体をエナンジョン病院から事務所へ運ぶのに、トラックで迎えに来てくれた彼。本当に悲しい。（後に私が復員してから、彼のお姉さんが色々と聞きにこられたが、本当にお気の毒だった。）

（昭和 52 年 1 月 12 日記）

○　ここからの行軍がまた大変で、泥濘で足首までつかり、ネチネチとくっつき、一日歩いても 5~6 ｋm位しか進めず、段々全員の靴あるいは地下足袋が駄目になり、布で足を巻いているだけのものも出る始末で、靴を履いている者は水気で段々足が膨れあがり、一度脱ぐと、今度靴を履こうとしてもなかなか入らず、大変はき難くなり、今考えてもぞっとする。私は割合こんな状態に堪えられる肉体だったが、林少尉は足に腫れ物ができ、見るにたえなかった。病気と疲労で歩行困難の者が出ると、竹で担架を作り、それに乗せて４人で担架をかついで歩くのだが、坂道ですべるぬかるみの道では、かついでいる方の人間が疲労でのびてしまう始末で、こんなことを幾日もやっている間に、とても他人をかつぐどころか自分自身の体だけでもどうにもならぬ状態になり、最後は担架をかつぐことも中止した。竹の杖で何とかあるくことだけがやっととなり、苦しくて歩くことも不可能になった者は、戦友に迷惑をかけては悪いと知らぬ間にジャングルの奥深くはいり、手榴弾で自決する者が続出してきた。

ちょうどこの苦しい頃、同期の大日方少尉（現在長野（？）市在住）もある日道路のそばの大木の根元にすわりこんで動こうとしないところへ私が通りがかり”お前、駄目だ、こんな所にへたりこんではいかん、死んでしまうぞ、立ち上がれ”と言って気合をかけたら、やっと動きだして何とか後から隊についてきて、結局一緒に内地へ帰れた一幕もあった。

○　この行軍の途中、小休止した時、疲労と睡眠の不足で、木の根元でスコールの中、マントを頭からかぶり、地べたに直接一時間もぐっすり眠ってしまったこともあった。この行軍の間（エナンジョンで渡河して対岸に渡ってからここまでずっと）わたしと一緒だった自動車修理工場の古田一等兵はアミーバ赤痢になってしまったようで動けなくなり、下痢を止めるために竹でつくった炭をたべ、歯と口を真っ黒にしながら何とかついて歩いてきたが、ある日、”もう自分は駄目だから、上原少尉殿、私を棄てていってください”というので、馬鹿なことを言うなと叱りつけ、部隊の先頭を歩くように誰かに依頼して私はその日部隊の最後尾を歩いて道端でのびている者を督励しつつ収容してその日の宿泊地点に到着したところ、古田一等兵がいないので皆に聞きまわったが、結局どこかで部隊から離れ、私の目につかぬジャングルの中に行ってしまたらしく、何とも捜しようがなく、本当に彼に申し訳なく思う。おそらく彼は気性の強い立派な男だったから、皆に迷惑のかから

ぬよう、自決したにちがいない。彼の冥福を祈るのみ。　　（昭和 52 年 1 月 14 日記）

◎　ペグー山系から脱出→マンダレー街道横断→シッタン河渡河へ。
○　7 月 20 日頃、ペグー山系の出口に割合近くなった所に数日待機したが、この時、28 軍の命令でシッタン河渡河のため、各隊は筏をつくり、これで渡河せねばならぬからと、筏作りの講習会があり、宇野中尉達がその教育を受けにいったと思う。そして大きな竹と樹皮の紐を各隊で用意することになり、その準備にかかり、兵隊は竹一本ずつかついで下山することになる。
　そしてここを 7 月 24 日~25 日頃出発し、2~3 日歩いてペグー山系の東端に出て、樹木の陰からシッタン河に至る平坦地を見た時、前途はどうであろうとも、これでジャングルを出て夢に見た平地に来たものだと本当に嬉しかった。そして点々と所々に民家も見え、万感胸を打つものがあった。
　かくて、ここから 2 日間の工程は平地で遮蔽物がないから飯も炊けず、湯も沸かすことができないので、背中の風呂敷の生米と水筒の水のみで丸 2 日間歩いたと記憶する。日射しが強く、流れ出る汗と体温で背負っている米が発酵し、もろみの如くなり、それを齧り、水筒の水をなめながら（飲む等ということはできない。なぜならば、次は何日後に木を燃して湯をわかすことができるか分からぬから-------。平地が相当続いていたから）歩いた。がまんできない心の弱い者は水筒の水を早く飲んでしまって、ついに牛車のわだちの跡の水たまりの赤褐色の汚水を飲む羽目に陥り、病気（アミーバ赤痢）になる者が続出。とにかく、２日ほど歩いて鉄道線路とマンダレーからペグー、ラングーンに至る街道を横断することになる。
　真っ暗闇の中、街道の土手下に待機し、敵の自動車の来たのを（通過を）確認し、ガサガサと急いで街道を横断した。ぬかるみばかり何日も歩いてきた我々にとって固い土の上に乗った時は本当に感激だった。とにかく急いで、燃料廠の部隊を全員横断させ、森の中に入ったと思ったとたん、街道筋を北の方から敵の自動車のヘッドライトが見え、あっという間に通り過ぎた。運がよかったなあと皆で顔を見合わせた。
○　このマンダレー街道を運よく無事に横断し、少し行ったところに砂糖キビ畑があり、先に行った部隊の連中がそれをバサバサ切り取って行ったのだが、我々も甘いものを長らくとっていなかったので、我先にと切りとり、持てるだけ持ち、しがみながら歩いた。しがみ粕を棄てていくので、その白い粕で日本軍の動きが敵に知れるので、軍参謀からの指令で、そんなことをしてはいけないと命令がきたが、我々は餓鬼のごとく砂糖キビをしがんだ。これは長い間、甘いものは一切なく、疲労の極みに達していた当時の我々でないとなかなか理解できないだろう。
　この時、久保山准尉は上手にたくさん採ってきれいに長さをそろえ、背中の荷物につけていた姿が不思議と今でも眼底に残っている。　　（昭和 52 年 7 月 8 日記）
○　かくて、この砂糖キビで何ヵ月振りかで甘い気分を味わい、感激の一瞬だったが、それからが湿地帯の難行軍となった。膝頭位までずぶずぶ入る位ならまだ良い方だが、ひどい時は胸までつかる所を歩くわけで、闇夜を磁石をたよりに方向を決めたら、目標を失わないため、田圃であろうが沼であろうが、ただ真っすぐ歩くだけで、ゲートルの上に蛭がくっつき、それがうすい服のところでは血を吸うわけで化膿し易い体質の人はそれこそ大

変で、みじめそのものだった。また、汚い水を飲むのと冷えとで、汚い話だが下痢をする者が続出、帝国陸軍の面影はやなしというところ。また、湿地帯の胸までつかる連日の行軍で、私の軍刀もついに抜けなくなり、えい、ままよと途中で棄ててしまう始末。こんな状態で数日間歩いてシッタン河畔に着いたという記憶だけで、どんな部落を通ったのかさっぱり思い出せず、断片的にしか記憶がなく残念である。
○　とにかく、苦労して、ついに７月末、シッタン河畔に到着、ここで鳥居大佐、神田副官以下全員で渡河準備を行う。ペグー山系から担いできた竹を筏に組み、夜中の 12 時頃から渡河すべく準備したが、雨季のシッタン河の増水はものすごく、河幅はおそらく 3~400 メートルもある。軍参謀からの通達では、夜の 12 時頃にわずかの時間、河の流れは平穏であるが、その時間帯を過ぎると渦が巻き、泳ぎ渡るのは困難とのことで、夜中の 12 時頃の
渡河と決定されたと記憶している。
　そして私達（７名？）の筏は宇野中尉と※※軍曹と私の３名が泳げるだけで、後の４名は全然泳げぬとのことで、島国育ちの日本人も案外泳げぬものだとがっかりした。とにかく三人で筏を対岸まで引っ張らねばならぬので、先頭は宇野中尉がロープで筏を引っぱり泳ぎ、金づちの４名が筏にくらいつき、軍曹と私が筏の後ろから押して泳ぐことにした。衣類等は全部筏の上にのせ、全員褌一つで泳ぐわけだが、対岸に向って泳ぎ始め 100 メートルも行った頃、上流のほうから筏がどんどん下流に流されてきてあっという間に過ぎ去るわけだが、その中に同じ本部の企画に勤務していた秋田鉱業出身の佐藤少尉が”頑張れ、頑張れ”の大声を出し元気づけているのが聞こえ、何とか助かってほしいと思った。だがどんどん流され、彼等はついに帰って来ず、彼の少しかすれた声のみ未だに私の耳に強く残っている。下流の方ではビルマ叛乱軍らしい銃声が聞こえ、下の方で岸にたどりついてもおそらく殺されてしまうようで、何ともいえず不気味な感じがする。
我々の筏は割合順調に進み、あと 20~30 メートル位の所に来た時、岸の上に神田副官等の姿が見え、元気づけてくれる声が聞こえてきたが、残念ながら急に渦巻きがおこり、どうしても筏は前にすすめない。軍曹は”上原少尉殿、筏を離して泳げる我々だけ対岸に泳ぎましょう”というので、”馬鹿野郎、泳げぬ者はどうなるのだ、貴様もし筏を離して勝手な真似をすると殺すぞ”と怒鳴りながら筏を押そうと泳ぐが何ともならず、残念ながらついに逆戻りすることにした。出発地点より下流の地点にやっとたどり着いたが、もう数 10 メートル下の地点では敵の銃声がし、殺される状況だった。我々は慌てて急ぎ出発地点の部落にほうほうの態で走り帰った。　（昭和 52 年 10 月 18 日記）
○　出発地点の部落に戻り、暖を取り対策を考えたが、筏は既ににな く、名案とてすぐ浮かぶわけはないが、渡河作業隊の持っているカヌーで翌日になれば渡してくれるということなので、一日待機し、翌日の夜、２～３名ずつカヌーに乗せてもらってやっと対岸に着き、一応生き残りの燃料廠の全員が集結できたが、大分人数が少なくなっていたと思う。これが多分 8 月 1 日で、これからモールメンへの難行軍が続くわけである。
（昭和 52 年 10 月 19 日記）

◎　シッタン河渡河後からモールメンまで
○　恐ろしかったシッタン河の渡河も相当の犠牲者を出したとはいえ、何とか部隊長以下

対岸に渡りついたわけで、いよいよモールメンへ向けての退却行が始まる。どうもこの辺からのことが記憶に定かでないのが残念である。

渡河のため、ほとんど使える武器もなくなり、敗残兵の哀れな姿でただ黙々と歩いただけで、ある時は森の中で野生の鶏が木よりも高く飛び立つのに驚いたり、また途中で小さな川を渡るのに渡河作業隊が両岸にロープを張って、我々がそのロープをつたいながら川を渡ることができたりしたが、川の名前等は全然わからない。

途中の土地の名前もほとんど記憶にないが、シュエジンという名前だけは頭に残っている。また、途中の道路わきに、先に退却したらしい戦闘部隊の兵の腐乱体があって神田副官等が土の中に埋めたりしてきたこともあった。

また、皆から（本隊から）わかれて少し勝手な行動を取った山下少佐が病気に襲われ、誰も付き添うものもいない状態だったが、一人の衛生兵と共に付き添ってくれた茂呂少尉の姿がはっきり目に残っている。結局、山下少佐も茂呂君も帰還できなかったが、茂呂少尉は我々と一緒に見習士官から任官した一人で、たしか中央大学の出身で、東京の下町育ちでなかなか気っ風のよい人に好かれる男だったのにと残念でならない。

○　我々と比べると老齢の鳥居部隊長は少し前かがみでぶつぶつ言いながら（この人の特徴）歩かれていたのが印象的であり、またお気の毒でもあった。

○　8 月 15 日頃と思うが、味方の前哨線に辿りつき、ほっとする。その兵隊に聞くと、菊か祭兵団とのことだったが、ああ、やっと味方の陣地に入ったと思った瞬間、急に命が惜しくなった記憶だけが残っている。それから 2 ～ 3 日退却を続けたが、どうも戦争が終わったらしいという情報が耳に入り、それで 2 ～ 3 日前から敵機が来ても爆撃銃撃がないと気がついたような記憶がある。

とにかく 8 月 20 日近くにモールメンに着いて人数を調べたら、確か 39 名だった。一緒に生き残って何とか歩いて来られたものは、ビルマ燃料廠 400 名のわずか 10 分の 1 かと感無量なるものがあった。

○　そこへモールメン出張所長をしていた中土少尉や、先にラングーンから下っていた山崎少尉等が来てくれたが、彼等は全然知らぬ顔をしているので、こちらから”おい”と声をかけて笑ったところ、やっと我々だと気がついたとのこと。それほど我々は 4 ヵ月の苦闘で栄養失調で昔の面影がなかったらしい。何はともあれ、それからモールメン出張所へ行き、ほっとする。そしてモールメンの市街の住宅を見て、都会の感覚を思い出す。

早速ドラム缶の風呂に入ったが、風呂に薪をくべてくれている昔の部隊長の当番兵（※※一等兵）が知らぬ顔をしているので、”※※一等兵、元気かい”と声をかけて笑ったら、彼はとたんに笑い顔で”上原少尉ですか、笑い顔でやっとわかりました”というので、本当に我々は変わったのだなあと自覚した次第である。

○　モールメンに到着する前から鳥居部隊長はすっかり元気がなくなり、モールメンの病院で亡くなられ、屋外で神田中尉（副官）等とダビにふし、箸でお骨を拾ったが、人のいい好々爺の部隊長が折角ここまで来られたのに亡くなられたとは誠に残念で仕方がなかった。お気の毒な次第であった。　（昭和 53 年 1 月 9 日記）

○　モールメンに数日間いたが、結局我々は泰（タイ）の自動車廠に引きとってもらうことになり、泰緬鉄道でバンコックへ行き、ルンビニー公園近くに駐屯していた自動車廠に転属ということになり、しばらくしてからナコンナヨークなる収容地へ行き、ここで色々の使役をさせられ、昭和 21 年 6 月、日本へ帰る。

○　ルンビーニ公園の自動車廠の連中のところへ、捕虜になっていた英兵がいよいよロンドンに帰れるようになり、捕虜になっていた間に自動車廠の人達に大変親切にしてもらったから英国に帰っても貴方達は無事に日本に帰れるように報告するよなどと別れを言いにくる英兵もいて、感激させられた。戦争中といっても、人間的には親切にしておくものだとつくづく感じた。
　また、バンコック市内を時々散歩して感じたことは、豪州兵は少し品がなく、柄が悪い印象を受けた。
○　4月20日エナンジョンから撤退開始し、モールメンに到着するまでの4ヵ月間を振り返ると、何度も死というものに直面し、今日はもう駄目かと何度も思ったが、その色々の恐怖の瞬間、人間ではどうにもならぬ死というものが脳裏をかすめ、いざ最後という時には神にすがらねばならぬ人間の弱さというか卑怯さというか漠然とではあるが体験し、学生時代から宗教心のなかった私でも神の存在を意識し、人間の弱さをつくづく感じた。

◎　ナコンナヨーク収容所の生活→帰国
○　バンコックから相当離れた淋しいナコンナヨークという所が日本軍収容地となり、自動車廠の連中も哀れな姿で貨車と徒歩で収容地まで行ったと記憶する。
　そこに到着して先ず自分達の住む宿舎をつくる。私は元来が自動車隊出身の将校だったので、自動車廠の中隊（中隊長石井中尉、現在新潟県在住）に配属され、旧燃料廠の連中の宿舎とは別棟になる。
　ここで西林大尉、石井中尉、横内少尉、神原少尉、松尾少尉等と知り合うことになる。
○　最初の間は、もっぱら英軍の命令（マウントバッテン将軍の指揮下）により、道路作りの作業にあたる。原野の中に自動車の走れる道路を造れとのことで、しかも40～80マイル／時（60～80㎞／時）で走っても車がバウンドしない平坦な道路を作れと命令され、まったく苦労させられた。食事の量は充分ではないし、いささかがっかりする。
○　この道路作業に出ない者は近くの山に行き、薪つくりに専念す。灌木を切り薪を何把もつくり、それを背負子（しょいこ）でかつぎ山を下り、自動車道路まで運ぶわけだが、それがまた大変で、最初は一人三把、四把もかついで降りたが、段々数を増やし、しまいには八把くらいかついで降りたと思う。私は体力があったので、兵隊に負けずにかつげるので、将校としてはよく私が指揮官を引き受け、薪つくりの作業隊長として頑張った。戦争に負けてからは口先の命令だけでは兵隊はなかなか我々の言うことを聞かぬので、率先垂範して見せぬと駄目なので私が引き受ける回数が多くなった。
○　収容所の生活に段々慣れた頃、ここに駐屯させられた光兵団（佐藤賢了中佐が指揮官）10万名の日本兵の中、将校に対して佐藤兵団長が戦争の勃発のいきさつから戦争中の外交の失敗等、我々の全然知らぬ戦争秘話ともいうべきものを話す13回にわたる講話があり、
”日本再建は君達若手将校の双肩にあり”とじゅんじゅんと話され感銘を覚えた。私達は戦争の本当の原因・状況等を知らされ、ただただびっくりするばかりだった。
　最初、佐藤中将の話のために集まれと言われ、ものすごい数の将校が集合し、おそらくつまらぬお説教かといやいやながら集まってきたが、第一日目の話を聞き出したところ、興味津々で、13回の講話に全然飽きることもなかった。出席の資格のない准尉連も出席したいと言い出す始末。
　この佐藤賢了もこの講話終了後、戦犯に決定。内地へ送還されていった。その出発を見

送るため、各部隊が道路側にずらりと整列、彼を見送ったが、当時としては一瞬涙ぐむ緊張の場面だった。（戦犯に対する感じは現在と随分異なるから理解できぬと思う。）
○　ある日、収容所から作業に出た帰りに神戸一中の一年先輩の中川氏（通称デンボ）に偶然会う。ちょとした立ち話で別れたが、その後、復員してまもなく神戸でも街頭で（元町付近）一度会ったが、現在は消息を知らない。
○　そうこうしているうちに、収容所全体の慰安演芸大会が行われた。俳優の沢田清のいる部隊もあり、我が自動車隊も一つ出し物を出す必要があり、劇をやったが、その芝居の中で吉村晃一君と二人で漫才をやったのも思い出の一つだ。
○　そのうち、野球大会も行われた。糸で固いボールを作ったり、自動車隊の工作車の旋盤でバットを作り、野球をやったのも思い出すと懐かしい。各隊の試合もあり、海草中学の皆岡捕手やジャイアンツの内堀選手がいたと記憶している。
○　マウントバッテン指揮下の英軍の駐屯地に電気を送るために、自動車廠の工作車を持っていき、発電して送電したこともあったが、こういう時は英軍の兵隊もサービスよく、煙草等をくれた。しかし、負けるということは情けないとつくづく思った。
○　我々の収容所の隣に貨物廠の収容所があり、そこの将校で顔を見た男がいると思ったら、北大で一年下の水産化学出身の溝口敦君で、彼は終戦大尉で、こちらは終戦中尉であった。彼は西林大尉（神戸一中の二年先輩）と仲がよく、それで知り合えた気がする。現在は極洋の常務取締役で、すぐ近くのビルに勤務している。
○　収容所内では何しろ腹が減るので食い意地が張り、現地人が売りにくるラクガン等を食べたいのだが、ビルマ燃料廠より来た我々は彼等現地人と交換する物資がなくて情けない思いをしたが、自動車廠の吉村君等はバンコックにいたので色々品物をもっていたので彼等が交換しては手に入れたものをいつも分けてもらって本当にありがたかった。人間、食べ物がなくなると浅ましくなるものだとつくづく感じた。
　収容所内で蛇がチョロチョロと走るのを見つけると沖縄出身の玉城少尉が追っかけ、手づかみでとり、焼いて嬉しそうに食べていた顔が忘れられない。しかし、現在彼の消息が分からないのが残念だ。　（昭和 53 年 11 月 9 日記）
○　タイの現地人がよく物々交換にくるが、平時ではとうてい食べる気のしないラクガンや豆枝？を色々の品物と交換し、無上のおやつとしてよく食べたのが忘れられない。また、道路わきで、ヤシ油であげたイモ等の揚げ物を売っているが、それは揚げたての熱いうちは食べられるが、冷えるととても臭くて食欲減退ものだったと記憶している。
　燃料廠の岡本忠夫氏が現地人に時計を見せてくれといわれ、腕からはずして見せて盗られたとか、あるいは盗られそうになったとか聞いた。油断もすきもあったものではないと皆で戒めあった記憶がある。
○　食事は充分な量がないので、皆で野菜作りをして補給したが、誰でも簡単に作れるチサを作り、それをどんどん食べたのが忘れられない。何しろ収容所にいた我々としてはこのチサが唯一の新鮮な葉っぱで貴重なる食品であった。　（昭和 54 年 2 月 8 日記）
○　我々は早く日本に帰りたい帰りたいといつも皆で話し合ってはいても、一体いつ帰れるものやらさっぱり見当がつかず、終戦以来月日もだいぶ経ち、焦りの色が出てきたが、結局 21 年 6 月 7 日にバンコックを出発、航空母艦で帰国の途につくことができ、ほっとする。船の中では色々の部隊がおり、ガラのよくない部隊では、兵隊をいじめた将校がつ

るしあげられたり、色々な事件があった。我が自動車廠はそんなこともなく、島本中尉というボクサー上がりの一風変った人がいて、こういう時はおさえがきき、助かったのかもしれない。

自動車廠の連中は麻雀を持っていたので、船の中では交代で麻雀をしたり、甲板で大海原を眺めたり、何とか時を過ごしはしたが、食糧が少なく、空腹でたまらず、吉村君が船員に頼み、唯一の娯楽品の麻雀を少しのカンパンに替えてきて、皆で少しずつほおばりながら、”情けないなあ”と天井を眺め嘆息したのが忘れられない。人間、空腹には勝てぬものとつくづく感じた次第。とにかく吉村君には本当にお世話になった。

○　6月15日浦賀につき、すぐ上陸させてもらえると思ったが、なかなか上陸できず、結局6月20日に上陸開始。復員事務を完了し、２、３袋のカンパンをもらい神戸へ出発できたのは6月22日の夜だった。やっとシャバに出てPeaceなる煙草の高いのに目を丸くしたのが忘れられない。

帰りの列車の中では敗戦の情けなさをつくづく味わう。朝鮮人の傍若無人の振る舞いにカッとする。6月２３日朝、列車が我が家のあった灘駅の辺りに来たが、一帯が焼野ケ原で、我が家も全然なく、これは駄目だと観念す。母や兄等はどうなったかと心配になる。

背嚢一つで三宮駅頭に立って、山の手を眺めると、増田さんの家のあった付近も全部焼けて跡形なく、一瞬がっくりする。こうなれば神戸一中の校庭で蚊帳でもかぶって眠るかと観念しつつ灘の家の方に行く。

灘の家の付近の焼跡をさまよい、哀れなる祖国の姿に情けなくなる。通りがかりの近くの人らしい人に我が家のことを聞くと、福住小学校の教室にある米の配給所に行けば多分知っているだろうとのことで、そこに出掛ける。そこで親切に一泊泊めていただき、兄が配炭公団にいることを聞き、翌朝その会社に出掛け兄に会い、ほっとする。母上も兄の家族も元気で三田に疎開していることが分かり、その夜、兄と一緒に三田に行き、母に会い感謝。

（昭和54年7月3日記）